

11
小国417
学図

文 部 省 検 定 済 教 科 書

財 団 法 人 教 育 図 書 研 究 会 編 修

教 育 學 部
資 料 室

四年生の 国 語 上



学校図書株式会社発行

教科
34
013

KC
G16

60304

教科書文庫

6
810.
34-1950
61304
49769.

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

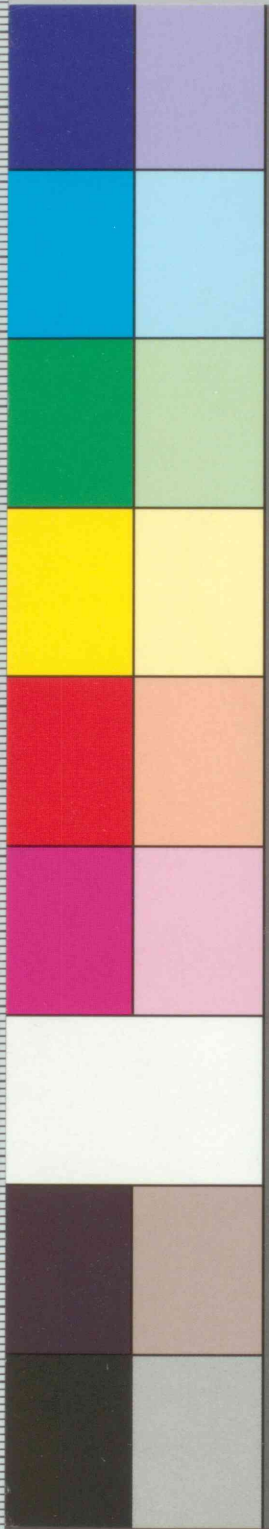
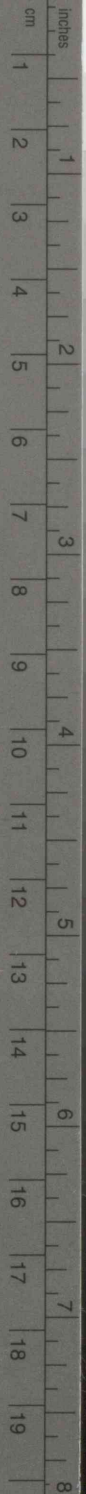


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



寄 贈

教科書文庫

6

810

34-1950

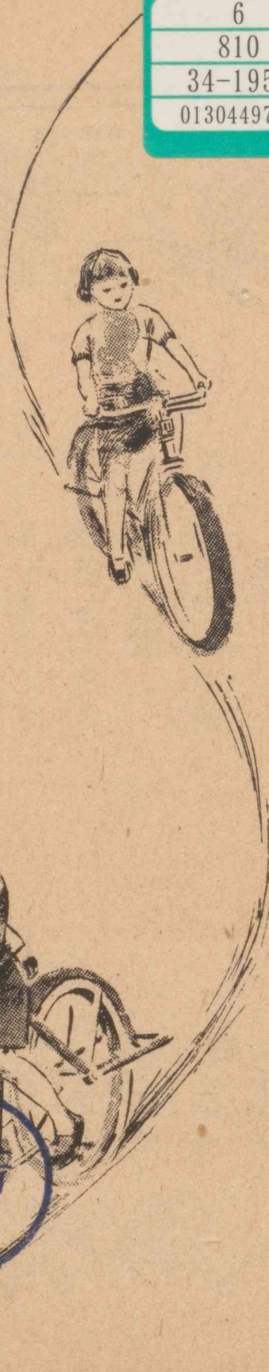
0130449769

昭和二十五年

月

日 文 部 省 検 定 済 小 学 校 国 語 科 用

四 年 生 の 国 語 上



中央図書館

広島大学図書

0130449769



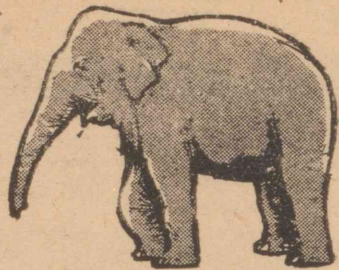
学 校 図 書 株 式 会 社

広島大学
教育学部図書

広島大学図書

0130449769





二

小鳥と親しむ

(一) 小鳥の観察

オージュボン・クラブ

すずめと少女

ちどりの観察

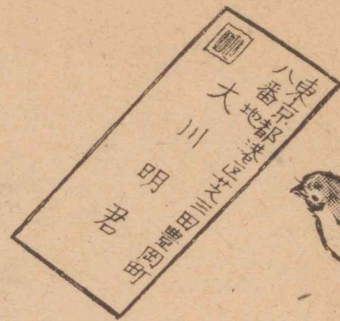
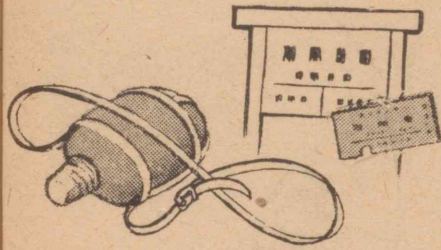
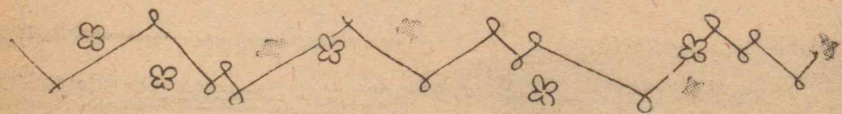
(二) 小鳥の童話

童話クラブ

リレー童話

童話の座談会

九十



一

春休み東京旅行記

もくろく

(九)(八)(七)(六)(五)(四)(三)(二)(一)

れんらく (手紙)

やくそく

れんらく (電報)

車中

東京駅

おかあさんへ

銀座あんない

上野公園

道子さんの詩

電車の中で

駅の花

三十九

三十七

三十七

二十九

二十三

二十一

十五

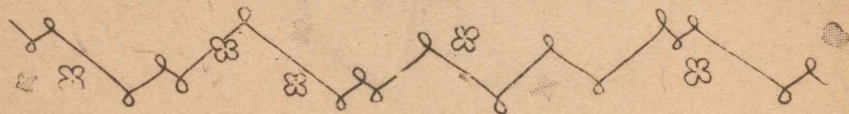
十二

九

七

六

五



春休み東京旅行記



この「春休み東京旅行記」は、かんさいにすんでいる竹田信二君が書いたものです。四年生になった春休みに、おとうさんとふたりで、いどこの大川明君の家にたいざいして、東京を見物しました。

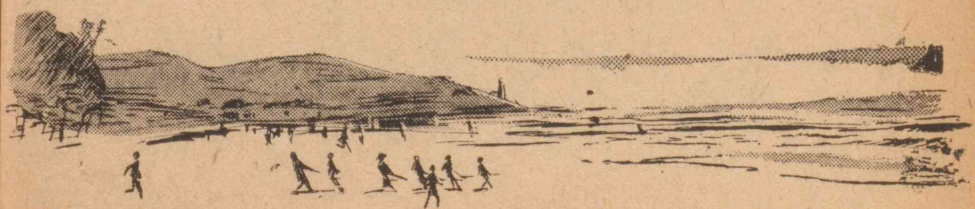
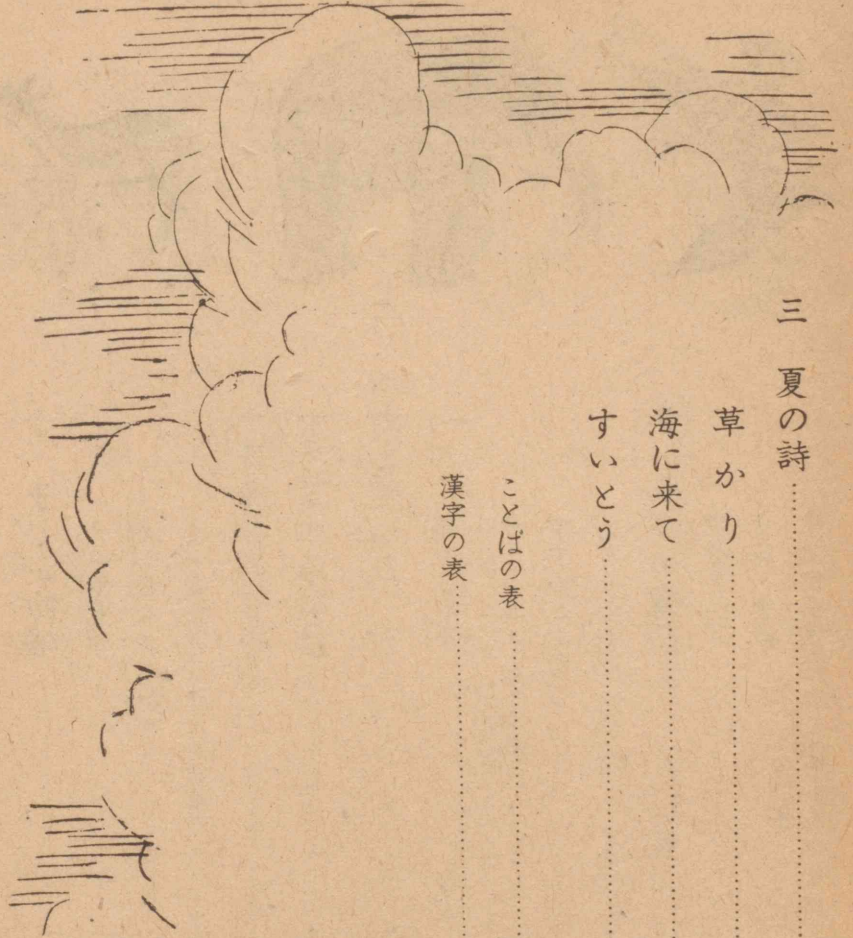
上京するまでのれんらくとか、列車の中のこととも書いてありますが、おもに東京での生活をノートにまとめて、旅行記にしたのです。

この旅行記には、いろいろのことが書いてあります。これを読むと、信二君がどんな子どもであるか、信二君は東京でどんなことを学んだか、信二君をむかえた明君や道子さん、そのおうちのことなども、よくわかると思います。

みなさんも、やがて、東京に行くことがあるでしょう。また、東京について、いろいろ知りたいこともあるでしょう。この旅行記は、きっと、そういうみなさんを、まんぞくさせてくれるだろうと思います。

三 夏の詩……

草かり……………	百	九十九
海に来て……………	百二	
すいとう……………	百四	
ことばの表……………	百七	
漢字の表……………	百十二	



(一) れんらく (手紙)

明君、おたよりありがとう。

ぼくたちをむかえていただくためのいろいろなプランを、細かくお知らせくださったことを心からかんしゃします。父も母も、こんなにしていただいては申しわけないと言っています。ぼくの心はもうとっくに東京の空へとんで行って、何も手につかないといったかっこうです。

父のしごとのつごうで、まだたしかな日がきまらず、気をもんでいます。出発の日がきまりしだい、電報でお知らせします。

みなさん、どうぞお元気でおくらしてください。
母からもよろしくとのことです。

さようなら

三月二十三日

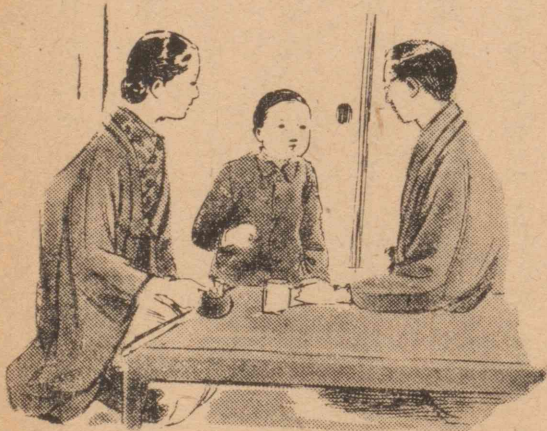
竹田 信二

大川 明 君

(二) やくそく

しゅうりょう式もぶじにすんで、ぼくはめでたく四年生になった。

「このごほうびは少し大きすぎたかな。」



と、おとうさんはわらいながら、ぼくをからかっているらしい。しかし、このやくそくは、どうしても、まもっていたかなければならない。

おかあさんがそばから、「いまの子どもたちは、わたしたちの小さいころとちがって、遠足でも旅行でも、なかなかじょうずにしますから、この東京見物が、これからの勉強にどれだけ役だつか知れませんか。ちょうどいい時ですね。」とおっしゃってください。

「少し古いが、やはり、かわいい子には旅をさせるだね。信二、おまえの東京旅行のプランを見せてごらん。」

ぼくは、きのうおかあさんに見ていただいた旅行プランを、おとうさんに説明した。

「ずいぶんよくばっているようだがだいじょうぶかな。」

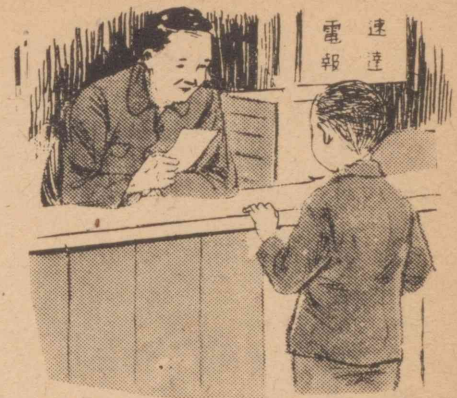
「ええ、きつとそれだけはやってきます。」

「もう前から、地図を開いたり、汽車の時こく表をしらべたり、はいかくを立てています。なかなか用意がいいんですよ。」
そう言っ、おかあさんがあとおしをしてくださった。

(三) れんらく (電報)

「それでは、いよいよあさって出発ということにして、電報をうっておこう。ひとつ電文を作っごらん。」

ぼくは、出発、乗車、東京駅とう着の時間など、前からしらべて



いたことをもとにして、

三ガツ二十八ニチゴゼン十ジトウキョウエ
キニツクデムカエタノムタケダシンジ

と書いて、おとうさんに見ていただいた。おと
うさんは、字数をかぞえていらっしゃったが、
「これではずいぶんむだがある。」

たいせつなことだけを残してもっとちぢめること。

あいてにわかつていることは書かないこと。

十の字は一〇と書くこと。

にごった音は二字に数えるから、その下は一字あけること。

字数が少なければ、料金も安いし、ゆうびん局にもそれだけ手

数をかけないことになる。」

などと、こまかい注意をしてくださった。

ぼくは、いろいろ考えなおして、

二八ニチ一〇ジ ニツクタノムシンジ

と、四十三字から十八字にちぢめて、また

おとうさんに見ていただいた。

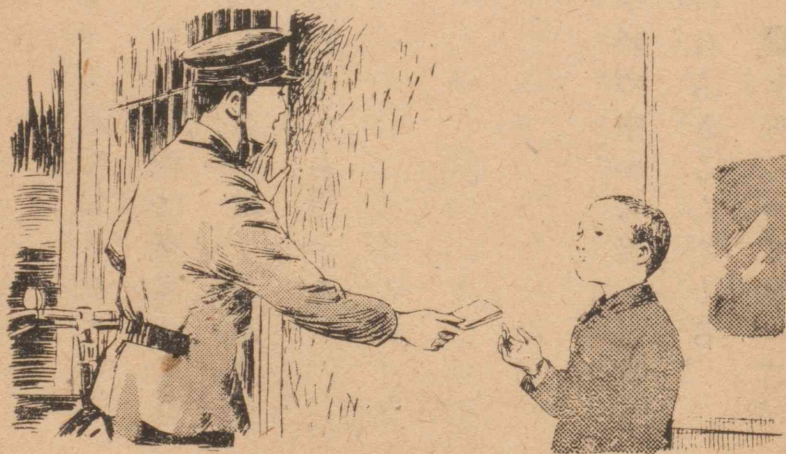
「よほどみじかくなつたが、二八ニチは、

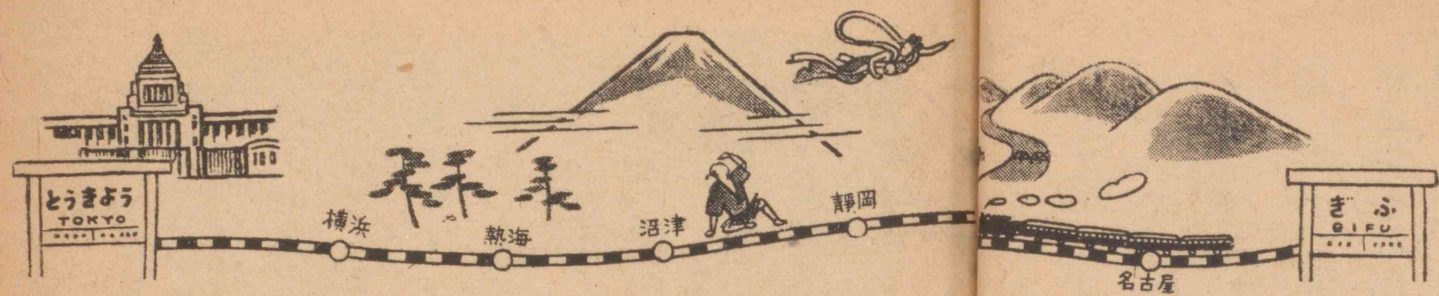
二八ヒとした方がよい。また一〇ジ ニ

ツクのニはなくてもよい。」

とおっしゃった。そこでぼくは、

二八ヒ一〇ジ ニツクタノム「シン





と書きなおした。

「これでよい。らしいん紙に書いて、すぐうって来ておきなさい。」
 ぼくは料金をしらべて、ゆうびん局へ走った。電報は東京までおよそ二時間で着くとのことだったから、夕はんどきには、みんなてぼくらのことを話題にしてくれるだろうと思ひながら帰った。

(四) 車中

おとうさんに起こされて、ゆめの中から目がさめた。
 夜明けのさわやかな風がまどからふきこんでくる。

「もうすぐふじ山が見えるよ。顔をあらっておいで。」

歯をみがき顔をあらうと、さっぱりした気持になる。
 ゆうべは汽車に乗るとすぐねむってしまったので、
 とちゅうどんなどころを通ったのかわからないし、うちのことを思ひ出すひまもなかったが、けさになるとすっきり、ぼくの旅心もおちついて、静かにまどのけしきを見送りながら、きのうからのことを思ひ出してみらる。

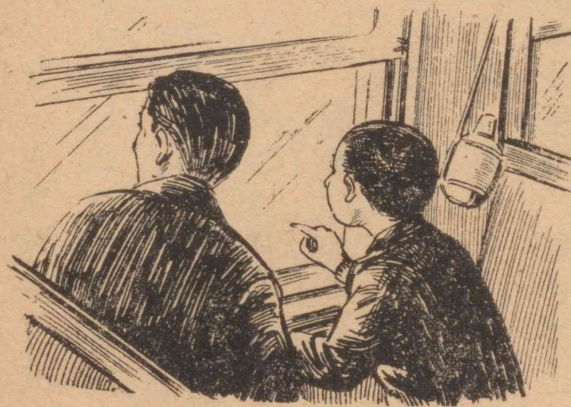
バスで遠い山道を走り、大きな町に出て、夜中にこの急行列車に乗ったこと、別れてきたおかあさんのことなどが、心にうかんでくる。列車は、あいかわらず、東海道を東へ東へと走っている。おかあさんの作って

くださったおべんとうを食べていると、

「それ、あれがふじ山だよ。雲の上にいただきが見えるだろう。」

おとうさんの声で、まどから少し顔を出すと、雲の上にまっ白な上半身をあらわしたふじ山が、ぼくのつけた見当よりずっと高いところにそびえている。

初めて見るふじ山、あまり近くから見ると、いか、今まで心の中にえがいていた、すそ野の長い、すっきりしたふじ山とはよほどちがった感じた。ぼくはいつまでもふじ山から目を離さず、ながめつづけている。そのうちに雲が晴れて、だんだん下の方が見えてくる。



列車がすすむにつれて、すそ野がひらけ、ふじ山はしだいにぼくの心にえがいていたふじ山に近づいてくる。

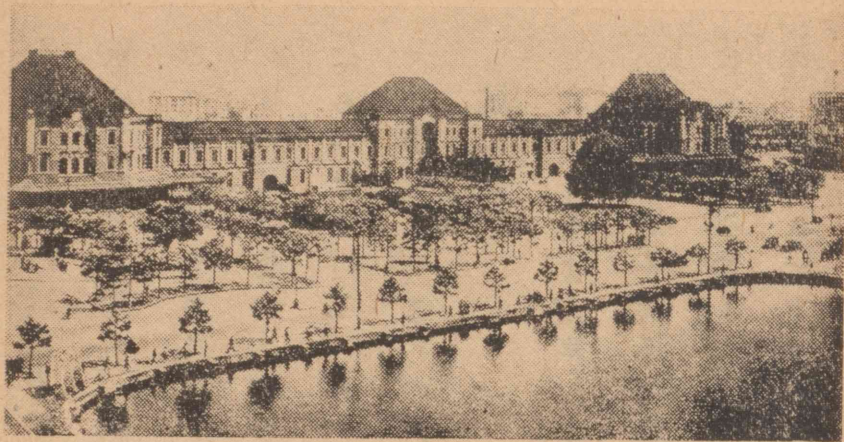
「さあ、ぬまづだ。東京まではもうひと走りだ。」

おとうさんのお話によると、昨夜おそく、はままつで、電気機かん車にとりかえたのだそうだ。

列車は気持よく走りつづける。ぼくは手ちやうの見学プランを見なおす。

(五) 東京駅

「よこはま、よこはま」と、かく声器の声。



ださったこの車しようさんとお別れた。そう思うとちよつと心残りがする。

「さあ、おりる用意をしよう。おまえのうった電報がうまくとどいていれば、明君たちが出むかえてくれるはずだが、どうかな。」

「きつと、とどいていますよ。」

ぼくは、ひさしぶりにあう明君が、どんな子どもになっているか、ちよつとはずかしいような、それでいて早くあいたいようなへんな気持になった。なんだかおちつけなくて、何度も立ったり、こしをかけたりにしているう

外国人、おつとめに出る人、かばんをさげた学生などで、駅には人があふれている。線路の両がわには、大きなたてもものや工場、人の目をひくいろいろなかんばんが、だんだん多くなってくる。大きな電車がものすごいひびきをたてて、ぼくらの列車とすれちがって走る。

そろそろおりるしたくをしている人もある。いつの間にかぎせきがすいていた。見なれない外のけしきをながめていると、ちよつとさびしい不安な気持になってくる。

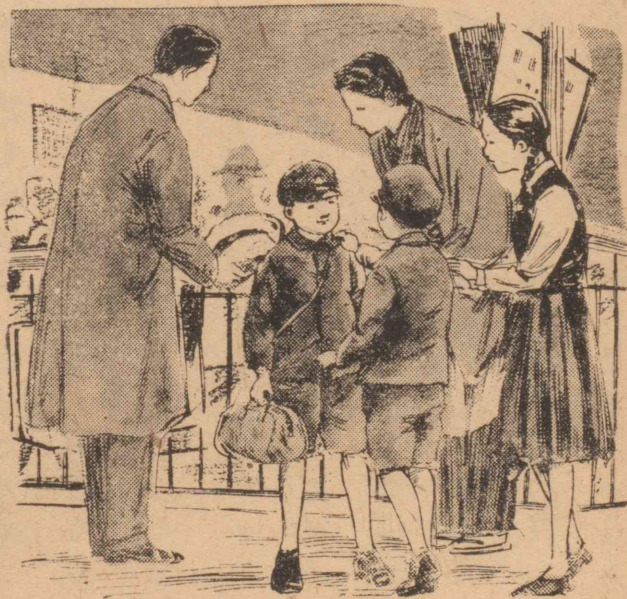
「長いご旅行おつかれでした。間もなく東京駅です。おわすれ物のないように、ゆつくりおおりください。」

昨夜からよく車内のことに気をくばり、お客のめんどうをみてく

ちに、列車は速度をゆるめて東京
駅にすべりこんだ。駅の時計はち
ょうど十時をさしている。
すいとうをかたにかけ、両手に
にもつをさげて、車内の通路を五
六歩歩くと、まどの外から、

「信二君」。

と、ぼくをよぶ声がした。おどろ
いてそちらを見ると、明君のこ
こ顔。列車をおりると、そこには、
道子さんとおばさんと明君が
待っていていらっしやった。



「まあ、まあ、ようこそ、おつかれさま。信二さん、ずいぶん大き
くなつて」。

「おじさん、いらっしやい。信二さん、いらっしやい」。

「いつもごぶさたしています。みなさん、お元気で何よりですね」。

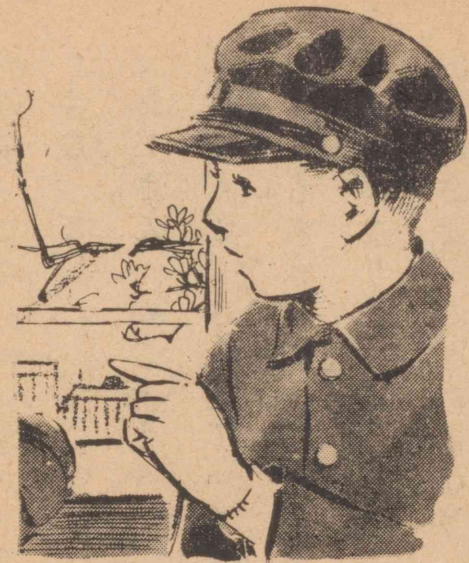
「どうもありがとうございます。明君、おむかえありがとうございます。お
せわになりますよ」。

「おばさま、ごきげんよう。道子さん、明君、ありがとうございます。母から
もよろしく申しました」。

「ぼくは、おかあさんに教えていただいたごあいさつを、やっとこ
れだけ言うことができました」。

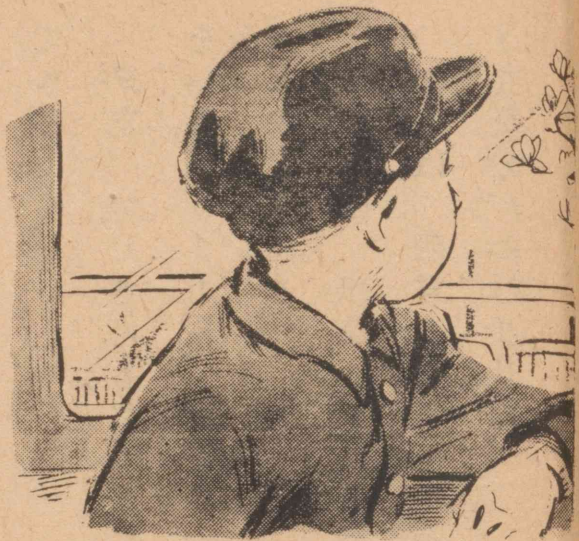
三人は、ぼくのものにもつをうばい取るように持ってくださいました。ど

のホームにも、いっぱいの人、何だいの電車がとまり、また走る。ぼくは、明君とやらんで、大ぜいの人にまじってホームのかいだんをおりた。ぼくよりずっと大きく見えた明君も、ならんでみるとふたりのせの高さはほとんど同じだった。きちんとかぶったぼうし、



みじかいズボンによくみがいたくつ、いかにも都会の子どもらしい明君。おさげのよくにあった中学生の道子さんも、きびきびとした明かるい感じだ。おばさんとおとうさんは、歩きながら何かしきりに話していらっしやる。

乗리카えた電車は、こう外の明君の



おうちの方へ走っている。葉の出ている木にまっ白くさいているのは、こぶしの花だろう。のどかな春の日にかがやいてとても美しい。

(六) おかあさんへ

おかあさん、無事に東京に着きました。

おばさんと道子さん、それに明君の三人が、出むかえていてくれました。汽車の中ではよくねわれましたし、ふじ山もよく見えましたが、本物のふじ山は、ぼくの思っていたふじ山とはだいぶんちが

っていました。たんなトンネルの長いにはおどろきました。先生から聞いていたこのトンネルをほった話を思い出しました。お茶畑、みかん畑などもよく見えました。汽車は一分のちがいのもなく、東京駅に着きました。おかあさんにならったように、よくごあいさつができました。

夕方、おじさんもお帰りになって、にぎやかにおいしいごちそうをいただきました。明君のつくえの上には、ぼくのうった電報がのせてありました。

あしたは、銀座へつれて行っていただけのそうです。

ぼくは、明君とやらんでやすむのです。まだ汽車に乗っているよ
うな気分がぬけません。

おとうさんは、おじさんとゆかいそうに話しています。

おかあさん、お元気で。おやすみなさい。

(七) 銀座あんない

明君の作文。
ぼくの東京見物記念にいただいたノートに
はりつけておこう。

きょうは、おじさんと信二君をごあんないして、みんなで銀座へ
出かけました。

まず、日本橋の大きいデパートなどを見てから、京橋に出ました。
橋をわたると銀座です。

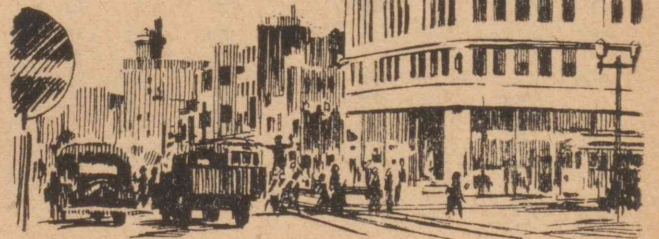
おじさんは、二三年前とちがって、銀座の商店がきれいになった
こと、はでやかな身なりをした人の多いことにおどろいて、

「東京も、すっかりかわりましたな。さすがに銀座ですね。ずいぶんりっぱになったものだ。」

と、感心していらっしやいました。

ひさしぶりに銀座に出たぼくらも、同じように感じました。

どのお店も、お客さんの目をひくような、りっぱな店かざりをしてあります。せまい歩道は、うっかりすると、すぐはぐれそうになるほどの人通りです。やなぎなみ木のやわらかなわか葉が、通る人のかたやぼうしをなでます。おかあさんが

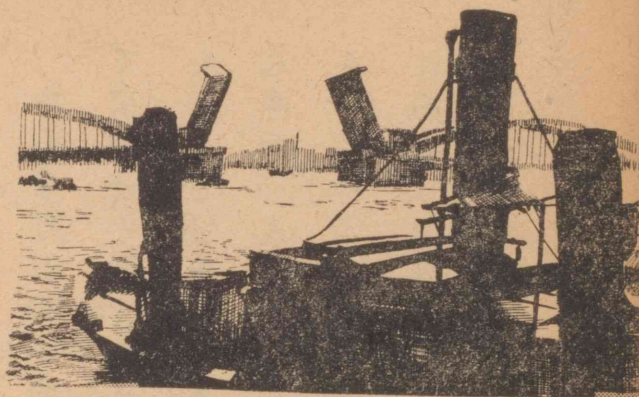


「明、信二さんがまい子になったらたいへんだから、よく気をつけておあげ。」

と、おっしゃったので、ぼくは何一つ見のがすまいとねっしんに見て歩く信二君に、くっついて歩きました。

おわり町の四つつじに来ると、おまわりさんが、十字路のまん中で交通せいりをしています。ふえをふきながら両手をあげて、「どまれ」の合図をすると、それにしたがって、電車も、自動車も、じてん車も、人の波も、ぴたっととまります。やがておまわりさんの向きがかわって、「すすめ」の合図がしめされると、いっせいにきめられた通りを歩きます。おじさんは、

「こんなにはたくさんの人通りも、きまりがよくまもられるので、ま



ちがいがないのだね。」

と、また感心していらっしやいます。

おかあさんは、

「ついでだから、ちょっと行ってみましょう。」
とおっしゃって、おわり町から左へ歩きだしました。しばらく歩くと、かぶき座、新橋えんぶ場、東京げき場などの大きなげき場があります。が、それから先は、ぼくも初めてです。すると、おとうさんが、

「このあたりは『つきじ』といって、海岸をうめたてて作った土地だよ。船着きがよいので大きな魚市場も近くにある。ここからこの大東京の家々へたくさんのお客がながつみ出されるわけだね。」

それから、向こうに見えるあの大きな橋が有名なかちどき橋で、時間になるとまん中がひらいて船が通れるようになっていた。と、ぼくと信二君に話してくださいました。

やがて、かちどき橋に着きました。橋の上で、しばらくすみだ川の川風にふかれてから、ゆっくり歩いてもどのおわり町にもどり、それから、すきや橋へ向かいました。

人波にもまれて歩きながら、両がわの店を見ると、色とりどりの小間物や、洋品るいが、にぎやかにかざってあります。中には、立ちよった外人をあいてに、英語で話している店の人もありました。

地上のいそがしさにまけないというように、高い新聞社の屋上を、でんしょばとがむれとんでいました。

このあたりは、たびたび来るので、ぼくもよく知っています。信二君に、いろいろ説明していると、おじさんが、

「つかれた。まったく目がまわりそうだ。ちょっと静かなところへ行こう。」

と、おっしゃったので、ひびや公園に行つて、少し休みました。おじさんは、木や花の名をいちいち説明してくださいました。

ぼくは、じゅ木の多い公園の中から見えかくれする、大きなたてものをゆびさしながら、えい画げき場やほうそう局などを教えてあげました。

公園を出て、左の方を見ると、皇居の高いやぐらのかべに夕日が明かるくさしていました。

(八) 上野公園

地下鉄を出ると、明かるい日ざしがまばゆい。きょうは、おとなりの安子さんもいっしょだ。

「信二さん、こちらよ。」と、道子さんのゆびさす方を見ると、すぐそこに、上野公園の森が見える。

石だんを上りきったところは、ちょっとした広場になっていて、ゆかたがけのふだん着で、いぬをつれたどうぞうのさいごうさんが、ここから毎日広い東京の町を見おろしていらつしやる。

すぐ下は、上野駅で、国鉄線電車のゆききがいそがしく、向こう

の方では、かもつ列車のいれかえをしている。

汽てきを鳴らして、長い列車が出て行く。

「どこ行きだろう。」

「青森行きかもしれないね。」

石の手すりによりかかった人が、そんな話をしている。ぼくの心は、あのまっかなりんごのなる青森へとんで行く。

さくらのなみ木は、今ちようどまんかいて、まるで花のトンネルだ。そのトンネルをくぐって、子どもたちがあとからあとから歩いて行く。おばあさんといっしょに、おとうさんとおかあさんに手を引かれて、お友だちとかたをくんで歩いて行く。みんな動物園へ行くのだろうか、上野公園はまるで子どもの公園だ。

動物園のきつぷ売場の前には、じゅんばんを待つ人が長い列をつくっていた。

きつぷを買って中へはいると、なんとまあ、よくもこんなに集まったものだと思うほどの人の波だ。

入口のすぐ左には、小さい子どもたちを乗せた小がたの電車が走っていた。

「おや、おや。」

ぼくは、その電車を見て、おどろいてしまった。かわいさるが、うんでんだいにちよこんとすわって、ハンドルをにぎっている。うれしそうにわらっている子ども、心配そうに、手すりにつかまっている子ども、おかあさんの方を見て、にこにこしながら手をふって

いる子ども……。おさるのうんでんしゅさんは、すました顔で、ガツタン、ゴットン、ガツタン、ゴットンと電車を走らせる。

カンガルーのさくの向こうにも、人が黒山のように集まっていた。何だろうと思って近づいてみると、それは、きりんだった。見上げるようにせの高いきりんは、長い首をふりふり、さくの中を歩きまわっている。

「前には、きりんは、二ひきいましたね。」

「そうですよ。一ひきは、食べすぎて死んだんですって。」

「見物人が、あまり、おかしやみかんをやったからですって。」

「だから、ほら、『食べものをやらないでください』というふだがかかっているでしょう。」

きりんを見ながら、人々はそんな話をしていた。

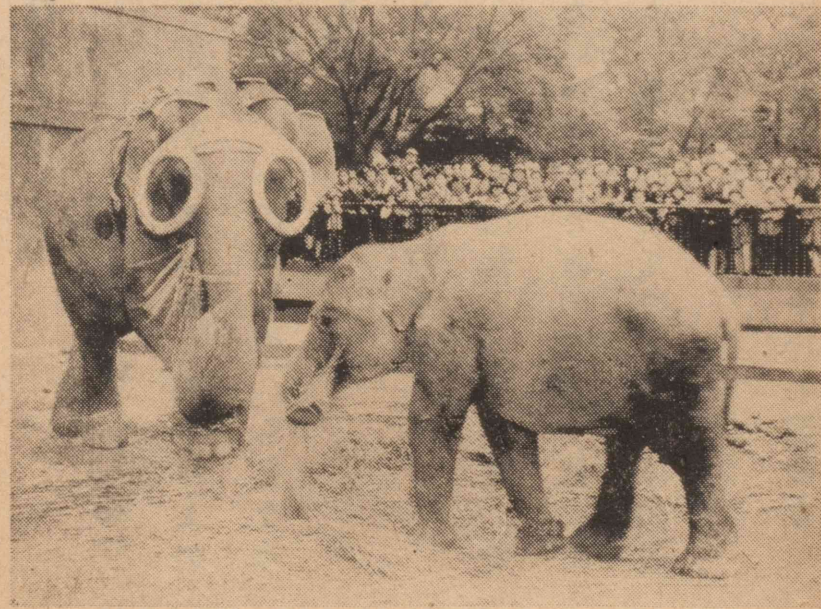
ぼくは、きりんのせの高いことは、これまでも知っていたが、ぼくの思っていたよりもずっと高い。まわりの高いかなあみの上から、頭をつき出して、人々を見おろしたり、かなあみのふちをなめたりして、なかなかあいきょうがある。

さるのたくさん遊んでいるコンクリートの山の前を通りすぎて、さか道を下ると、いろいろの水鳥が、楽しそうにおよいでいた。このあたりは、いくらか人だかりが少ないので、そばのベンチにこしをおろして、おやつを食べ、それから、楽しみにしていたぞうのところへ行った。

ここは、きりんのところの何倍もの人だかりだ。やっと前の方に

出てみると、はい色の大きなぞうが、えさばこのわらを少しずつ、長い鼻でじょうずにまき上げて食べていた。向こうにも、まだ子どものぞうが、長い鼻をふりながら、あちこちと歩きまわっていた。からだのわりあいに小さい目、大きな耳、本物のぞうを見るのは、ぼくも初めてだったので、とてもめずらしかった。

「小さい方は『はな子』、大きい方は『インデイラ』』という名まえなのよ。」



と、道子さんが教えてくれた。

はな子さんはタイから、インデイラさんはインドから、日本の子どもたちにくださったのだそうだ。

「インデイラさんは大きいから、そうでもないでしょうけど、小さいはな子さんは、お国がこいしいでしょね。」

「でも、日本の子どもに、こんなにかんげいされているのですから、はな子さんも、喜んでいるかもしれませんよ。」

安子さんと道子さんが、こんな話をしている。からだは大きいが見ていると、することがむじやきで、とてもかわいいところがあり、いつまでもそばをはなれたくない気がする。

それから、ライオンやとら、ひょうなども見た。

「これで、かばがそろったら、もとの動物園と同じですね。」
どこかのおばさんが、ぼくのそばで話している。

動物園を出ると、さっき、ぼくたちがはいった時より、もっとも
つと、長い行列がつづいていた。

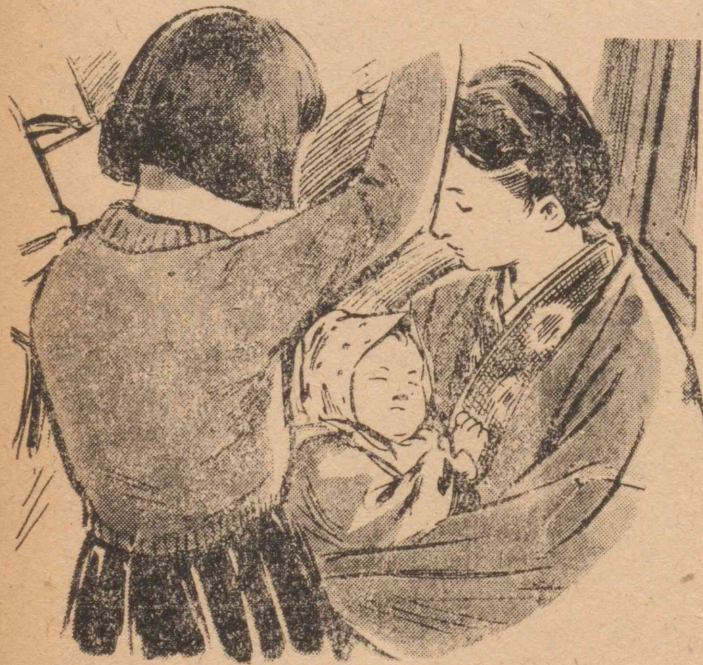
それから、絵のてんらん会をやっている美術館、むかしのめずら
しい品物を集めた博物館、きかひやひょうほんをならべてあるとい
う科学博物館の前を歩いて、またどうぞうの前まで来た。このつき
上京した時は、こんなところもゆっくり見学したいと思った。

道子さんと安子さんは、用があつて銀座へまわるので、ぼくは明
君と上野駅から電車に乗って帰った。明君がもうどこからでも家に
帰れるのには、すっかり感心した。

(九) 道子さんの詩

電車の中で

電車の中でわたしは見た
だかれてねむるあかちゃんを
ねむりながら小さなその手が
おかあさんのむねのあたりを
つかんでいるのを



この二つの詩は道子さんの作。
これも東京旅行の記念にぼくの
ノートにうつさせてもらった。

わたしは見た

あかちゃんをだくおかあさんの

心配そうなまなざしを

やさしそうなほおえみを

こみあう夕方の

電車の中でわたしは見た

まわりの人たちが

だまってみんなて

あかちゃんとおかあさんをかばうのを

駅の花

この駅は、わたしが毎日お世話になる駅です。

この駅は、いつもきれいにはかれています。

いつでも、水がまいてあります。

けさ

この駅の、かいだんの上り口

だれにでも、よく見えるところに、

たけの高い、カンナの花が、いけてありました。

古い台に、古いつぼ

それに、いけ方も、むぞうさですが、

花はかっど火のように赤く
広いじょうぶな葉は　まだ　つゆにぬれていました。

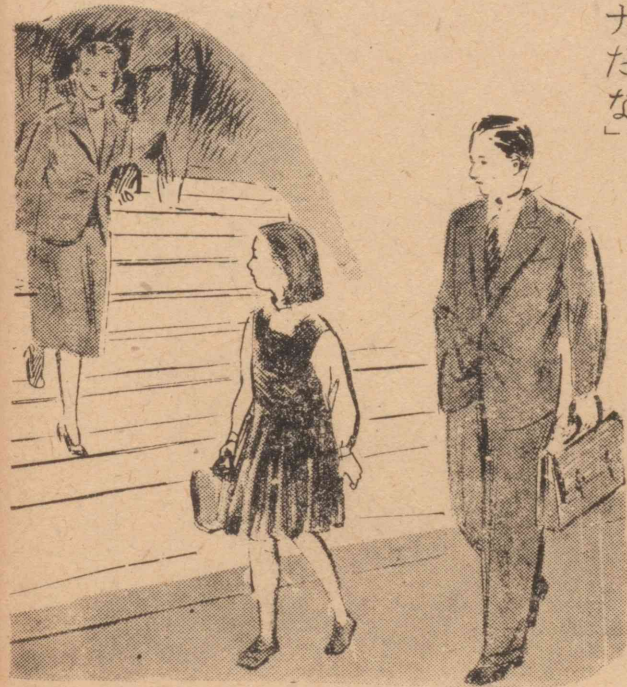
「あ、花がいけてあるぞ、カンナだな。」

「あら、ほんと。きれいなえ。」

乗る人、おりる人、

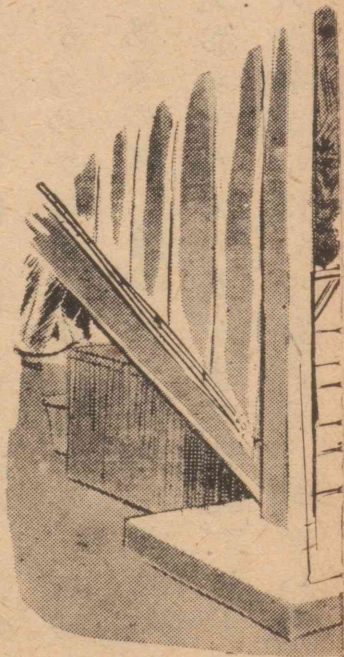
男の人、女の人、

人ごみの中で　わたしもこの
花を見ながらかいだんをのぼ
りました。



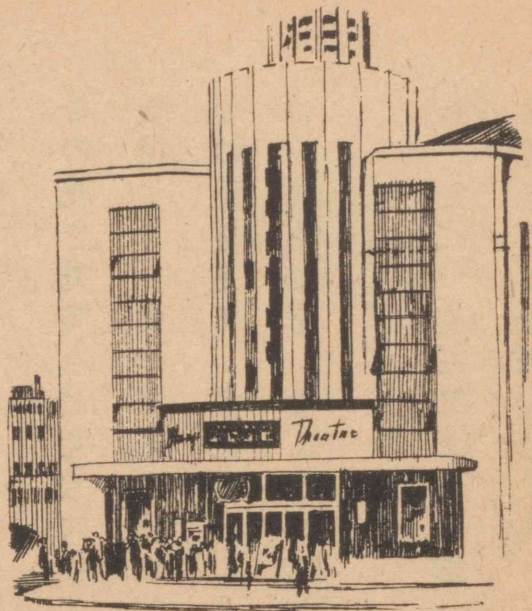
電車に乗っても

さっきの　カンナの色が
目の中からはなれません。



この花を見て　どんなに　たくさんの人が
気持よく　おつとめに出かけたことでしょう。
この花を見て　どんなに　大ぜいの人
つかれた心を　なぐさめられて　帰っていくことでしょう。

わたしは　まだ日ざしの強い　なみ木の道を歩きながら、
こんなことを考えました。



(十) 子じか物語

えい画見物

きょうは道子さんにつれられて、
えい画見物に出かけた。

げき場の前には、もうたくさんの
人がつめかけていた。しかし、入場

けんには、ざせきの番号がうってあるので、自分のせきはちゃんと
きまっている。ベルが鳴って、見おわた人たちが出て来た。

しばらくたつと、待っていた人が静かにはいり始める。わかい女

の人がしんせつにざせきを教えてくれた。

ぼくらのせきは中ほどから少し後にあつた。三人はならんでこし
をかけた。ふわりとかげごちのよいいす、明かるくて広い館内、
ぼくはめずらしくてあたりを見まわしていると、静かな音楽がはじ
まった。だれもかれも、さっぱりした服そう、楽しそうな顔、館内
はじつにおちついている。道子さんは、入口で買って来たえい画の
かい説を読んでいる。

そのうちに、ベルが鳴り、場内はだんだん暗くなり、地からわき
出るようなおちついた音楽が聞こえてくると、やがて天然色えい画
「子じか物語」がうつり始めた。

アメリカえい画なので、ことばはまったくわからない。日本語に

なおした説明がスクリーンのかたすみうつるのだが、よく読めない。ぼくは道子さんにおそわったように、それにはなるべく目をとめないようにして、画面だけを一心に見ることにした。そうすると、ふしぎなもので、知らない英語もいくらか通じるように思われた。ぼくはすっかり物語にとけこんで、時のたつのもわすれてしまった。長いえい画がすんで、外へ出る。高いたてものの間に夕日がしずんで行く。おつとめから帰る人の波にもまれながら電車に乗った。感げきした三人は、家に帰っても、えい画の話をやめなかった。わすれないうちに、この物語のすじと、えい画の美しさ、ぼくの心を動かされたことなどを書いておこう。そして、これもおほかあさんへの大きなおみやげにしようと思う。

えい画のすじがき

今から七十年ほど前、フロリダ地方の未かい地をきりひらいた小さな農場に、わずかばかりの畑をたがやしてくらしている三人の親子があった。人ざとはなれたかいこん地のくらしには、別にこれという楽しみもなかった。その上、水や食べものには、いつも不自由と不安がつきまとうのだった。

父のペニーはほがらかな人で、十二オのジョーデイとはまるで友だちのようだった。けれども、三人の子どもをなくした母のオリーは、いつもさびしく、その顔に、明かるい光がうかぶことも少なかった。ある朝のこと、かっている子うしと子ぶたが、何者かのためにこ

るされていた。そばに残っている見おぼえのある大きな足あとで、たびたびこないたずらをするくまにちがいないということがわかった。父は、さっそく、三びきのいぬをつれて、くまがりに出かけることになった。ジョデイも、父にたのんでついて行った。

くまのいどころをかぎつけておいかけるいぬ、そのあとを走るふたり、手にあせをにぎるものすごいかくとう、だが、旧式の鉄ぼうのかなしさ、おしくもこのくまをとりがしてしまった。

父は、いい鉄ぼうがほしくてたまらなかつた。そこで、ジョデイといっしょに、かなりはなれた別のかいこん地に住んでいるフォレストラーの家に出かけていって、いぬと新式の二れんじゅうととりかえてもらった。

その家には、ジョデイとなかよしのフォダウインという動物ずきの子がいた。この子はいろいろの動物をかっていたし、動物のことについてよく知っていた。その夜、ふたりは、木のえだにかけて作ったたなの上で、いろいろな話をしながらねた。

いく日かのち、父はまたフォレストラー家をたずねて行くとき、やぶの中でがらがらへびにかみつかれた。しかし、父のおちついた手当て、ジョデイのしんけんはたらき、通りかかったしかのおかげなどで、あぶないいのちを助かった。

だんだん元気をとりもどす父のまくらもとで、ジョデイは、父のいのちを助けてくれたためじかが死んであとに残された、かわいそうな子じかを、かわせてくださいとたのんだ。両親のゆるしが出て、



ジョデイは大喜びで子じかをさがしに行き、やつと見つけだして、だいて帰る。ジョデイの喜びや、かわいい子じかを見ると、母親もおえまずにはいられなかつた。

これから、子じかとジョデイの生活が始まる。昼は林の中や雲の美しいおかの上を、かけまわり、夜はねどこでいっしょにねて、子じかに話しかける。明かるく、楽しいジョデイの生活だった。

ところが、そのうちに、かわいい子じかがだんだんいたずらを始めようになった。ある日、三人が町に出かけたるすに、子じかはいせつなたばこのなえを食ってしまった。しかし、ジョデイがど

んなに子じかをかわいがっているかをよく知っている父は、

「もっと広く土地をひらいて、わたを作ろう。そして、その金でいどをほろう。いどができれば、おかあさんも楽になるから。」

と言ってくれた。ジョデイは父の心に感しゃし、この仕事を力いっぱい手つだった。

しかし、その仕事のために、父はまた病気になった。ジョデイは、父に代わってよくはたらいた。ところがまた、子じかは、だいいなともろこしの芽を食いあらすという大いたずらをしてしまった。

こんども父はしからないで、「これはおまえのせきにんだ。残りのたねをまきなおし、畑には高いさくを作るように」と命じた。それは、ジョデイにとってはいへんな仕事だったが、両親へのおわびと、

かわいい子じかのために、すきで畑をたがやし、たねをまき、うまや車でまるたをはこび、父とのやくそくどおり、とうもろこしの芽が出るまでにさくを作りあげようとした。そのねっしんなはたらきを見て、しまいには母も手つだつてくれて、さくはみごとにできあがった。ジョデイは母にだきついて感しゃした。

しかし、この努力もまたむだになってしまった。一年子に成長した子じかは、この高いさくもなんなくとびこして、出たばかりの芽を、一夜のうちに食いあらしてしまった。

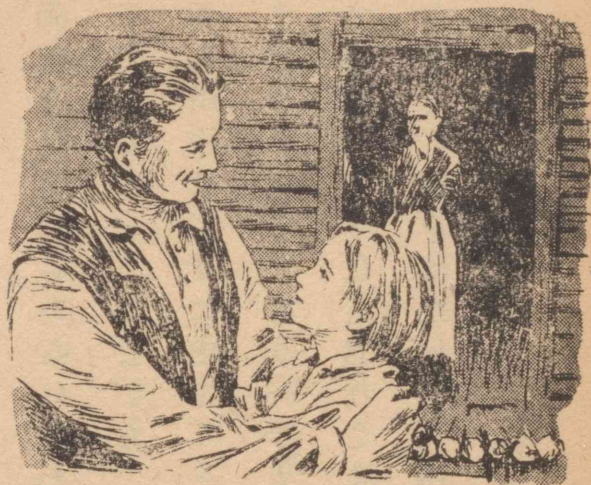
こうなつては、さすがの父もだまつてはいない。

「おまえも、できるだけのことはした。しかし、野そだちの子じかが作物を食いあらさないようにすることは、とてもできない。食

料はわたしたちにとって何よりたいせつなものだ。きのどくだがもう仕方がない。子じかを遠い森にすておいて。」
と言う。ジョデイにももう返すことばがない。

子じかを失ったジョデイのかなしみは大きかった。やがてそれは両親をさえうらむ心になつて行つた。家をとび出したジョデイは、子じかの名をよびながら、林やぬま地をさまよい歩いてゐるうちに、ある川のほとりに出た。そこにはこわれかけたボートがあつた。うえとつかれて、もう一歩も動けなくなつていたジョデイは、力つきてそのボートにたおれこんだ。ボートは氣を失つたジョデイを乗せたまま、岸をはなれて、川の中へ流れ出て行つた。

さいわい通りかかった船に助けられたジョデイは、ひとりしよん



ようにはたらこうと、やさしくジョデイを上げますのだった。

そこへ、三日間ジョデイをさがしつづけた母が帰って来た。戸外に立って、父と話し合っているジョデイのけなげなことばに、母はいつかなみだをうかべていた。

ぼりと帰って来た。あきらめかけていた父は、ジョデイをだきしめて喜び、ジョデイも、両親をうらんで悪かったことをわびた。

父は、ジョデイがだんだんたのもしくなってくることを喜び、これからも、力を合わせて、ゆたかな生活のできる

ほのぐらいランプの光の中で、母は、もうねどこにはいつていたジョデイをだき起こして、やさしくことばをかけた。これまで、いつもさびしく、暗かった母の顔も、いまは、あたたかいほおえみにほころびている。

母のむねにだきしめられたジョデイも、にっこりほおえみかえす。その夜、ジョデイは、子じかといっしょに遊んだゆめをみた。あの林の中を、まっ白な雲の下を、美しい小川のほとりをかけめぐった、あの楽しい日のゆめを。

えい画を見た三人の感想

これは、ほんのすじがきだけで、えい画は、もっともっとくわし

くえがきだしてある。一つ一つの場面を細かく書いていくと、この何十倍もの長さになる。いや、どんなに長く書いても、えい画をそのまま写し出すことはできないだろう。これが、えい画と作文とちがうところだと思う。このえい画を見て、ぼくたち三人が話し合った感想をいくつか書いておこう。

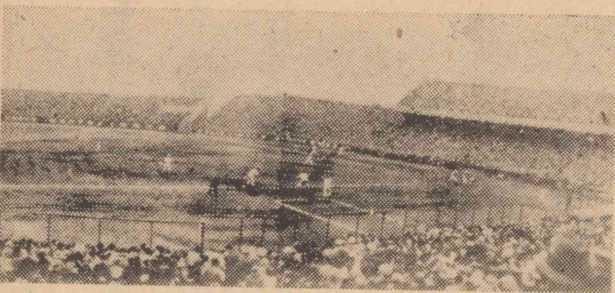
- 一、天然色えい画の美しいこと。とくに雲と水の色がすばらしい。
- 二、ジョディが子じかをかわいがるやさしい心にうたれた。
- 三、アメリカの子どもはよくはたらくし、両親も子どもをあまりあまやかさず、子どもにせきにんを持たせて仕事をさせる。
- 四、つめたいように見えなおかあさんも、ほんとうはやさしい人で、えい画のおしまいにそれがわかってうれしかった。

子じか物語は、最初アメリカで本になって出たもので、最近は日本語で書いたものもあるそうだ。ぼくは道子さんが読んでしまったえい画のかい説をいただき、本になった「子じか物語」をおみやげに買って帰って、友だちにも読ましてあげようと思っている。

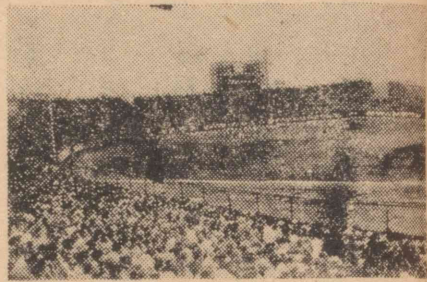
(十一) 帰りのしらせ

おかあさん、お手紙ありがとうございました。
おとうさんも、ぼくも元気です。銀座や上野を見物したこと、地下鉄に乗ったことなどをお知らせした手紙はとどいたでしょうか。
ぼくはきのう、道子さんにつれられて、「子じか物語」というすば

らしいえい画を見て来ました。これは、ぜひ、おかあさんやお友だちへのおみやげ話にしたいと思っています。



きょうは、明君とふたりだけで、ぼくの第一のきぼうであった野球を見に行きました。東京では、ことし初めてのプロ野球なので、後楽園球場はたいへんな人出でした。明かるい春の日ざしのふりそそぐ緑のそばふ、しっとりとしめった土、まっ白い線、打つ、走る、なげる、受ける。せんしゆたちのすばらしい活やくがくりひろげられました。今まで、写真でしか見たことのなかった、有名なせんしゆたちのしあいぶりを目の前に見て、ぼくはすっかり満



足しました。この野球見物も大きなおみやげになりそうです。こんど帰ったら、おかあさんがもつともつとスポーツずきになり、野球のほうそうなどもよくわかるようにしてあげようと思っています。

おとうさんのお仕事もかたづいたようですし、見物の計画も大部分すませましたから、明後日にはこちらをたって帰ることにします。もしかすると、この手紙より先に、ぼくらが帰り着くかもしれまんね。

おかあさん、お元気でね。となりのおばあさんにもよろしくおっしゃってください。

さようなら。

(十二) 夏休みには

一週間の東京たいざいは、またたく間に過ぎて、もうあしたは、東京をたつ日になった。ぼくも少しよくばったかなと思ひ、おとうさんにも、「だいじょうぶかな」と言われた見物のよていもおわってしまった。明君や道子さんが用意してくれていたプランもあったので、ぼくの計画以上に、いい勉強ができた。

おじさんやおばさんにかわいがっていたことも、ありがたかったし、いどころうしがいつそう深く知りあったことも、うれしかった。

ぼくの東京旅行記は、大きなノートをふくらませている。ノートには、見学のこと書いてあり、写真や、新聞の切りぬき、動物園、野球場、えい画などの入場けん、おかあさんからおたよりもはりつけてある。

ぼくはいつも、明君とつくえをならべてこのノートを書いた。よく、おばさんからほめられたが、東京の子どものよい勉強ぶりも学ぶことができた。

買ったおみやげ、いただいたおみやげ、心の中にしまつてあるおみやげなど、いろいろのおみやげを持って帰るのだが、このノートにもそのおみやげのたねがたくさんはいつている。

ぼくはこのノートをもとにして、まず、おかあさんに、それから



小鳥と親しむ

野も山も町も、新緑ににおう初夏のころは、小鳥たちにとっても、楽しい季節なのです。みなさんは、きっと小鳥ずきだと思えますが、日本の小鳥は、年々その数が少なくなっているそうです。小鳥と親しんでください。小鳥をかわいがってやってください。

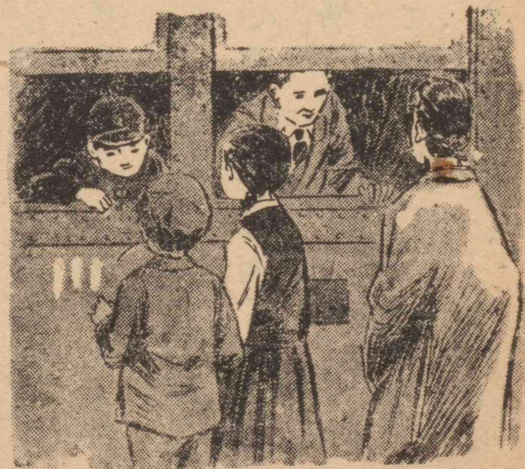
ここには、小鳥をかわいがったり、調べたりする、日本やアメリカの子どものこと、ちどりの生活、それから、小鳥ずきの子どもたち八人で書いた童話、それについての座談会などがのせてあります。みなさんは、これをよく読んでください。もっともっと小鳥に親しむようになってほしいと思います。

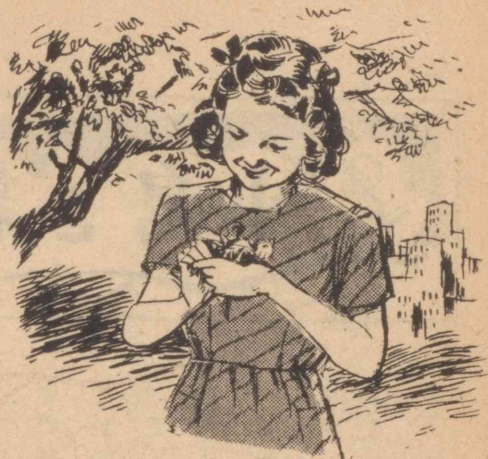
日本はもともと、小鳥のそだつものには、とくべつによい国だそうです。小鳥をかわいがる心は、人を愛し、世の中を愛する心にもつながっています。小鳥の住みやすい国は、きっと、美しい、しあわせな、平和な国にちがいありません。

先生やクラスの人に、いろいろの話をしよう。作文や詩も書きたいと思っている。もう少し長く東京にいたい気持ちがする一方、ぼくらの帰りを待っていてくださるおかあさんに、早くあいたい気持ちも強く動いている。

夏休みには、道子さんと明君とに、ぼくの家に来てもらうやくそくができた。ぼくは、どのようにしてふたりのいとこをむかえたらよいか、その相談も、早くおかあさんになりたいと思っている。

明君とまくらをならべてねるのも今夜までだ。





(一)

小鳥の観察

オージュボン・クラブ

いま、ひとりの子どもが、公園で一わの小鳥をつかまえました。ポケットからアルミ

ニュームの板金を取り出して、小鳥の足にむすびつけます。そして、

「さあ、からだに気をつけて、わたしたちの勉強をてつだってね。」
と言って、その小鳥をはなしてやりました。

このような少年少女がアメリカのいたるところに見られますが、これはオージュボン・クラブの会員なのです。

オージュボン、クラブというのはどんなクラブでしょう。その名は鳥類学者オージュボンの名まえをとったもので、アメリカでは、もう四十年も前から、このクラブの子どもたちが中心となって、小鳥をかわいがる愛鳥週間をつづけています。いまクラブ員が小鳥の足につけたニュームの板にはその子どもの会員番号がつけてあり、子どもは前につけていた板金と自分のとをとりかえたのです。そして前の板金は、つかまえた場所、年月日、天こう、気おんなどを書き入れた報告書といっしょに本部に送ります。本部では、この報告書によって小鳥の調査材料を作るのです。

鳥にきょうみを持つ子どもたちは、よくオージュボン・クラブへ行きます。ここにはいろいろの材料が集めてありますから、どんな

ことでも調べる事ができます。

鳥は、わたしたちの生活ときりはなすことのできない有益な仕事をしてくれれます。農作物の害虫をたくさん取ってくれれます。たいせつなじゆ木をからす悪者をつかまえてくれます。

わたしたちの国は、よその国にくらべて小鳥が少ないそうです。そしてその小鳥がまた、たいそう人をおそれています。小鳥をかわいがりましょう。森や林をそだて、そこにたくさんのおすばこを作ってやって、小鳥たちの住みよい国にしようではありませんか。

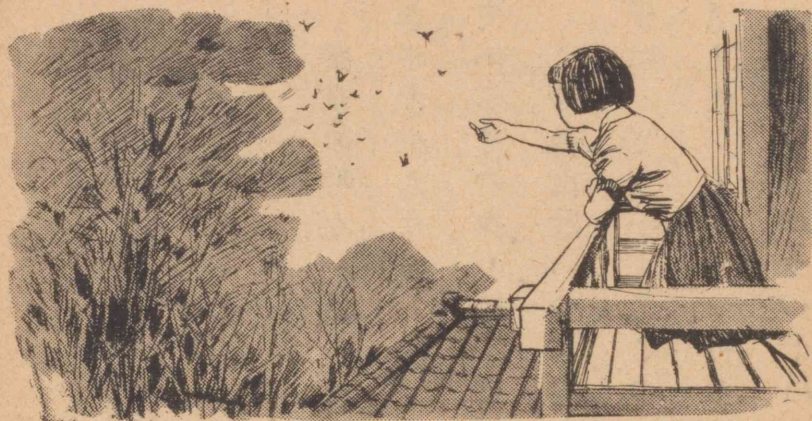


すずめと少女

東京の町なかに小さな森がありました。そこには一本の高いけやきの木がありました。うす緑のわか葉が明かるい日ざしにかがやいているその森の近くに、小鳥ずきの女の子が住んでいました。

この森にはいつもたくさんのおすずめが遊びに来ました。この女の子は、どうかしてこのおすずめたちとなかよしになりたいと思っていました。しかし、町のおすずめはなかなか人になつきません。

そこでこの女の子は、二かいにある自分のへやのまどぎわにござ



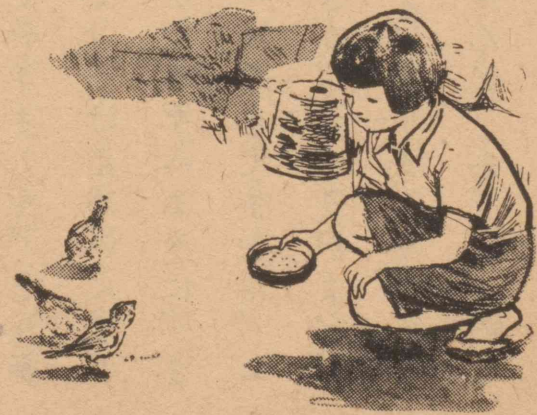
をしき、その上にお米やあわなどを入れた
小さなおさらをおきました。しかし、何日
たつても、すずめはこのおいしいごちそう
を食べに来ません。でも、女の子は、こん
気強くこれをつづけました。半月ほどたつ
たある日のこと、二三ばのすずめが、おそ
るおそるやって来て、このえさを少し食べ
てくれました。二三日たつと、すずめの数
は七八わになり、中にはへやの中ほどまで
はいつて来るのもいるようになりました。

女の子は、毎日えさをつぎたしては、す

ずめたちのすることを観察しました。ところが、その七八わの中に、
一わだけ、頭にちよつと白い毛のあるのがまじっているのを見つけ
ました。女の子は、とくにそのすずめに目をつけ、そのすずめが庭
に来ると、いつもチュツ、チュツとよびかけてやりました。それか
らは、この一わのすずめをならすことにいっしょうけんめいになり
ました。少しでもこのすずめをこわがらせることのないように、ま
た、どうかして自分の心が通じるように、細かい注意をしました。二
か月半ほどたつと、すずめはすっかりなれてきて、女の子がよべば、
どこからでも飛んで来て、へやの中で遊ぶようになりました。

そのうちに、この白い頭のすずめは、だんだんと、たくさんのな
かまをつれて遊びに来るようになりました。

すずめたちは、早起きです。朝、この家の雨戸があくのをまちかねて、何ばかのすずめがへやの中へ飛びこんで来ます。女の子がかがみに向かってかみをゆっていると、すぐうしろまで来て、ふしぎそうに首をかしげているのが、ちゃんとかがみにうつるのです。女の子は、すずめがかわいくてたまらなくなりました。



すずめたちは、へやの中で遊びあきると、外に出てはっばとほこりをたててすなをあびたり、時には大きな虫をくわえて引きずってはしりもちをついたり、それはそれは楽しそうです。女の子もすず

めたちとすっかり友だちになって、毎日楽しい日をすごしました。

二

これは、ある鳥の研究家が書いた文の一節ですが、おそらく本当にあったことでしょう。

よくなれたすずめが、家の中で、子どもと遊んでいるなどというようすは、想像しただけでも楽しそうですね。私たちはよく小鳥は害虫を取ってくれるから、かわいがってやりましょうということを知ります。たしかに小鳥から受けるおかげは、私たちがどんなに大きく計算しても、本当はその何百倍、何千倍、いや、どうして私たちがのんびりできるほど大きいものでしょう。私は、小鳥をいじめ、小鳥をおっぱらった村が、たちまち、ひどい虫の害を受けて、

生活ができなくなったという童話を読んだことがあります。

ところで、この少女は、そんなかんじょうめいた気持で、すずめをかわいがったのではありませんね。少女のやさしい心が、ひとすじにすずめへの愛となって、こんな美しい話が生まれたのでしよう。小鳥に親しむ心の深さは、どこから出てくるのでしよう。それは、決して、小鳥が虫を取ってくれるからなどというところからは、生まれてこないのです。

かわいい小鳥の顔、いつどこで見ても美しいすがた、それに、かわいがってやれば、人の心もよくわかる小鳥。

この話は、小鳥をかわいがり、小鳥に親しむ心がどこから生まれてくるかを教えてくれる、とてもいい話ですね。

ちどりの観察



むかしから、「波にちどり」ということばのとおり、ちどりはいつも波のそばにいる鳥です。水の近くにいたので、はまべや川原など、水の近くのすな地に、すをこしらえます。こんな所は、かならず広々として見通しのきく所ですから、敵に見つけられやすいのです。それだけに、敵を用心するせいしつが、他の小鳥たちよりも、ずっとすすんでいます。

ちどりのすはそまつなもので、ただその

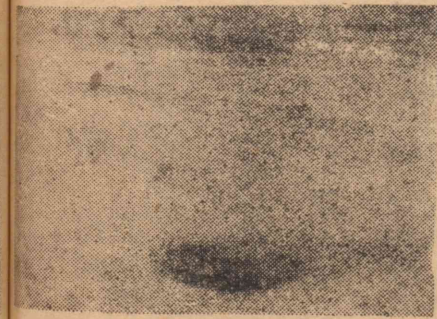


あたりのすなを少しくぼめただけで、ちょっとおわんのような形を
しています。そして、その底に小石をしきつめ、小石の上にはかれ
草や小えだなどをのせます。こんなそまつなすですから、かえって
敵の目につかないわけでしょう。

ところが、おどろいたことに、ちどりはもつとちえをはたらかせ
て、本当のすのまわりに、いくつもうそのすを作るのです。うその
すもまた、すなをくぼめただけのものですが、そん
なのが本当のすの近くに、二つも三つもあります。

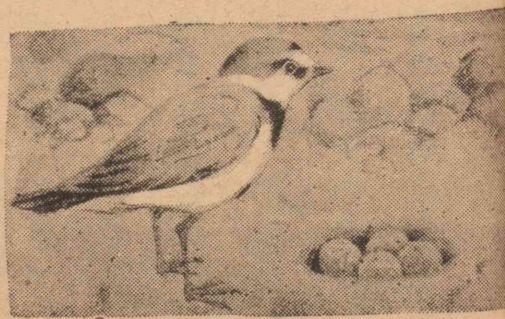
ちどりは、すの中に四つのたまごをうみます。

どれもどがった方を下にして四方からすの底に向
けるので、ちょっとなの花のような形になります。



このようにならべると中心がくぼみますから、親
鳥のからだはうまくそのくぼみにはまります。

このたまごは、かっ色がかつたはい色をしてい
て、その地色の上に、いくらか色のこい点々がた
くさんついています。それがまわりのすなの色に
よく似ているので、なかなか、敵の目につきません。



ところが、親鳥はさらにちえをはたらかせて、もしも人が近づい

たりすると、たまごをだかずに、すからはなれた所にある石ころな
どをだいて、人の目をくらますのです。わたしは、ある時、石ころ
をだいている親鳥をじつと見ていたことがあります。一時間たっ
ても親鳥は石をだいているのです。しまいにはきのどくになって、

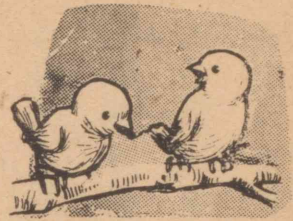
親鳥を安心させるために、その場をはなれました。なんとという用心深さではありませんか。

第三はひなです。ひなのからだの色もすなの色に似ています。そればかりでなく、かえったひなは、その日のうちに、ちよこちよこ歩きだします。ちどりのひなは、見はらしのいいすなの上で生まれるので、そんなところにあるずに、いく日もぐずぐずしていると、敵の目について、害を受けます。

ところが、親鳥は、ひなにえさをはこんでやりながらひなをかばっています。もしも、そういうところへ人がさしかかったりすると、急にかた足をおかしなかつこうに上げて、ひよこひよここと人の目の前を歩いていきます。人は変なちどりだと思って、その親鳥に気を

取られてついていきます。親鳥は五十メートルでも百メートルでもびっこのまねをして少しずつ遠のくので、人はどこまでもついていく気になり、やがて、ひなからずつとはなれてしまいます。つまり、親鳥はこうして人をひなからわざと遠ざけたので、別にびっこでもなければ、けがをしているわけでもありません。そして人とひなとの間がじゅうぶんにはなれてしまって、もうきけんはないと見てとると、今までのびっこのちどりはパツと飛びたってしまいます。

ちどりは、「波にちどり」の絵やもように書かれたり、ピヨピヨという鳴き声がきれいなので、和歌にうたわれたり、はいくの題になつたりしますが、そのような見方だけでなく、小鳥のいろいろなせいしつを観察してみるのも、おもしろいことではないでしょうか。



(二) 小鳥の童話

童話クラブ

ぼくたちのクラスでは、このごろ童話を作ること 시작했다。自分の考えていることを動物に話させたり、したいことを魔法使いのおじいさんにさせてみたり、石や雲に心やことばを持たせたりして、いろいろおもしろいものを書いていく。しかし、中にはあんまりでたらめになって、かえってつまらなくなっていくものもある。まず、童話に取り上げて来る人とか、動物とか、自然とかを、よく観察して、その形やせいしつなどを細かに知ることがたいせつだ。

その上でおもしろくすじをまとめるようにしなければならぬ。

この間、先生からこんな話があった。

「みなさんの書く童話は、このごろなかなかおもしろくなったが、中には少しゆきづまって、初めのころよりつまらないものや、心をうたないものも出てきている。そこで、ひとつ、こんなことをやってみてはどうだろう」

それは、何人かひと組になって、リレー式に書く童話のことだった。まず、あるひとりが童話の書き初めをする。あるところまで書いて、そのつづきをつぎの人にまかせる。第三の人は、またそのつづきを書くというようにして、何人かで、一つの童話を書きあげるのである。

このリレー式の童話を書く上に、先生の注意されたことは、
一、おたがいに、その童話のすじについては相談しないこと。
二、受けつぐ人は、前の人の書いた部分をよく読んで、その話を
広く深くひろげていくこと。

三、しかし、ひとりひとりはあまりよくばって長く書かないこと。
四、おしまいを受け持つ人は、お話をしっかりまとめること。

五、題はでき上がったから、相談してつけること。

六、でき上がった童話についてよく話し合うこと。

ぼくは、先生のお話を聞いているうちに、さっそくやってみたく
なって、友だちに話しかけ、八人のグループができた。童話は話を
持ちかけたぼくから書き始めることになった。

ぼくは、いろいろ考えた後、いつか書いてみたいと思っていたぼ
くのすきな小鳥の童話を書くことにした。

リレー童話

(一)

林 ゆたか 作

冬が近づきました。小鳥たちは、もうみんな南の国
へ飛んで行ってしまいました。ところが、ある一羽の
小鳥は、つばさをいためていたために、ほかの小鳥た
ちといっしょに南へ帰ることができませんでした。秋
も深くなって、だんだん寒さがくわわってきました。
今のうちに、森の中の、雪やしもがかからず、風のふ
き通らない、あたたかい所を見つけなければなりません。



ん。その小鳥はさんざんくろうして、やっと森のおくには行って行きました。そして、こんもりと、あたたかそうにしげっている木から木をたずね歩いて、「どうか、わたしにあたたかいへやをかしてください。」と、たのみました。

いちばん初めにたずねて行ったのは、はんの木でした。

「はんの木さん、こんにちは。わたし、おねがいがあるのです。」

「どんなねがいだ。」

「わたしは、このとおり、はねがひどくいたんでいるので、南の国へ帰ることができず、ひとりだけとり残されてしまったのです。

春になってお友だちが帰って来るまで、あなたのえだの中に、住ませてください。」

「まっぴらだ。ぼくたちは、この森に住んでいる小鳥を助けてやるだけでもたいへんなのだから、よそから来た者などのおせわはとてもできないよ。」

「そうですか。それじゃ、わたしなんかとてもだめね。」

(二)

青山ゆり子 作

そこで、こんどは、かしわの木のところへ飛んで行きました。

「大きな、大きなかしわさん。わたしのお友だちが南の方から帰って来るまで、わたし、あなたのしげったえだの中であらしていてもいいでしょう。どうぞそうさせてくださらない。」

「いつまでだい。」

「あたたかくなるまでよ。」

「そんなに長い間、居そうろうされてはたまらないね。おまえなんかその間何をするか知れたものじゃない。もし、ぼくの木の實を食べられたりしたらめいわくだ。えだをかすのはごめんだよ。」

かしわにもことわられたかわいそうな小鳥は、どこかに、しんせつない木はないものだろうかと思ひながら、

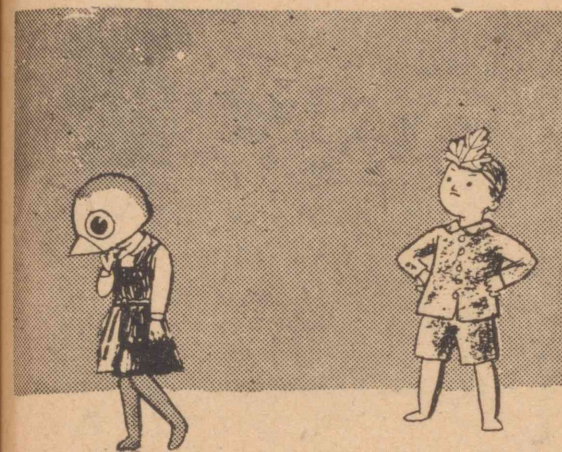
また森のおくへ飛んで行きました。

すると、こんどは、高いけやきが小えだをいっばいにひろげているのが、目につきました。

(三)

北川なるみ 作

ああ、そうだ、けやきがいい。けやきの木は人がいいらしいから、きつと二つ返事でひ



きうけてくれるだろう。

「やさしい、やさしいけやきさん。これごらんささい。このとおりわたしのつばさはいたんでしよう。それで、わたしはほかの鳥といっしょに、南の方へ飛んで行けなかつたのよ。この冬をどうすごそうかと思つてこまっているの。春まであなたのあたにかいえだの中においでくださらない。」

「そうなれなれしく話しかけても、ぼくはきみを知らないよ。知りもしない小鳥を、えだの中に住まわせることなんかできないね。ほかの木でもさがしてごらん。どこの者ともわからないきみにしんせつにしてくれる感心な木が、ないともかぎらないからな。」

小鳥は、もう、どうしていいかわからなくなつてしまいました。

(四)

山田正男 作

すっかりつかれてしまった小鳥は、そばのかれ木のえだにとまって、なんども大きなためいきをつきました。するとその時、どこからか、ふしぎな声が聞こえて来ました。

「小鳥よ、小鳥よ。おまえは今どこへ行こうとしているのかね。」

声のする方を見ると、大きな大きなもみの木が立っていました。

「わたしですか、わたしは、もうすっかりつかれてどこへも飛んで行けないのです。それにこの寒さが身にしみて、今にもたおれそうなのです。」

「そうか。それはかわいそうだね。さあ、ここへおいで、おまえさえよければ、この冬中、わたしのえだの中でくらしでもいいよ。」

「本当ですか、もみの木さん。おいていただけますか。」

「うそは言わないよ。春までだろうが、夏までだろうが、おまえのいい時までゆっくりお休み、けっしてえんりよはいらないよ。ごらん。わたしのえだや葉は、こんなによくしげっているだろう。どんな寒さが来たってだいじょうぶだよ。とてもあたたかだから。もみの木は、ふるえている小鳥をだいて、しんせつに言いました。」

(五)

野村春男 作

もみの木のそばには、まつの木が立っていました。

まつの木は、もみの木とうれしそうに話している小鳥を、じっと見ていましたが、やがてしんせつにことばをかけました。

「かわいそうな小鳥さん。ぼくのえだはね、もみの木のえだみたい

に、ぶあつくしげってはいないけど、このとおりじょうぶにできているだろう。ぼくは、あのつめたい北風がきみにあたらないうに、いくらでもかばってやるよ。」

「それは、どうもありがとうございます。まつの木さん、よろしくおねがいました。」

小鳥はもみの木のあたたかなふところの中で、うれしそうにつばさを動かしてお礼を言いました。

(六)

中島 進 作

「ねえ、小鳥君。」

と、こんどは、まつの木となりになっていた大きいかしの木が、ことばをかけました。

「ぼくもきみを助けてあげよう。もみの木君はあなたにへやをかす。まつの木君は北風をふせぐ。そこでぼくは、食べ物をいくらでもあげることしよう。ごらんさい。こんなに実がいっぱいになっているだろう。このきんじよの小鳥はみんな、ぼくの実を喜んで食べるのだよ。」

「まあ、そう。それはごしんせつにありがとうございます。」

小鳥は、こい緑の葉をしげらせたかしの木を見上げて、うれしそうにお礼を言いました。今しがたまで、ひとりぼっちで、ずいぶん心細かったこの小鳥も、やさしい三本の木のおかげで、すっかり幸福になりました。

(七)

高田 広 作

ところが、小鳥のねがいをことわったふしんせつな木のなかまは、おたがいにいじわるな顔を見合わせ、こんなことを話しました。ま
ずはんの木が、

「ねえ、きみ。見ず知らずの小鳥を、えだの中へ住まわせることな
んか、ぼくらにはできないよ。あのもみの木やまつの木は、よっ
ぽどものずきだな。」

すると、かしわの木が、

「ぼく、自分のたいせつな木の実を、だれにやるのもいやだよ。だ
ってそうだろう。夏以来せつかくだいじにみのらせてきたんだも
の。」

「そうだとも。」

こんどは、けやきが口を出しました。

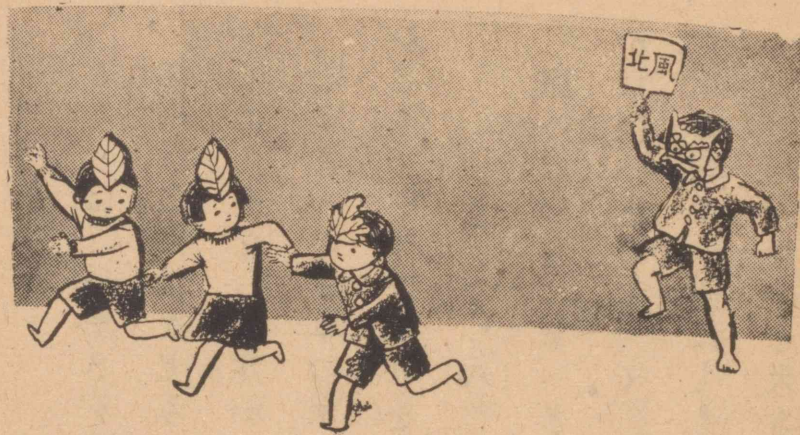
「ぼくはね、おなじみの鳥だって、あのおしゃべりはうるさくって
しょうがないんだからね。」

こう言つて三本の木は、しんせつな木の悪口を言ったり、自分の
ひとりよがりばかりをおしゃべりしていました。

(八)

大川 明 作

深い森の中にも、きびしい冬がやって来ました。緑の葉は、にわ
かにはい色になって、しょんぼりとしぼんでしまいました。それか
ら、毎朝まっ白にしもがおり、夜は夜で、はげしい北風が氷のよう
につめたい両手を大きくひろげて、森の木の上をなでまわしました。



あのいじわるな三本の木は、まっ先にじまんの葉や実を落とされてしまいました。しかし、小鳥を住まわせているしんせつな三本の木のことをよく知っているしもと北風は、冬の間も、青々としげった美しい葉の落ちないように、気をつけてやりました。

童話の座談会

五月二十日(金) 教室にて

出席者 木村先生、林、青山、北川、

野村、中島、高田、大川

司会 山田

山田 「先生をはじめみなさん、お集まりくださってありがとうございます。これから、ぼくたちが初めて書いたりレリー式童話のことを話し合って、これからもっとよい童話を書けるようになりたいと思います。いろいろご意見を出してください。」

高田 「いちばん初めを書いてくださった林君におたずねしますが、きみが考えていた童話のすじと、このでき上がったのをくらべてどう思いますか。」

林 「そうですね。すっかりちがっています。ぼくは、あの小鳥がしんせつな女の子に助けられて、鳥かごの中で春を待つというように考えていたのですけど……。」

青山 「わたしの考えていたすじとも、よほど変わってきています。」

北川「ほんとに思いがけないところへ、はこばれていっていますね。」
林「そこが大ぜいの人で書くリレー式童話のおもしろいところじやないでしょうか。」

先生「山田君、あの小鳥が、はんの木からかしわの木、けやきの木、などとたずねまわって、四番目にもみの木にうつるところがありませんね。あそこはおもしろいところですが、どうしてあの木を考えたの。」

山田「ぼくは、早くあの小鳥を助けてやりたくなったのです。そこで、うちの庭にあるもみの木を思い出したのです。」

中島「ぼくは、小鳥の食べものを心配しました。でも冬中葉があって実のなる木を思いつかなくてこまりました。しかし、かし

の実を小鳥が食べるかどうか、これはどうもあやしいね。」

北川「そうですね。はとはかしの実が大すきですけどね。ただこの鳥はわたり鳥だから問題だね。童話といってもでたらめではいけないから、あとで、みんなで調べよう。」

山田「すじの運び方について大川君ほかになにか……。」

大川「いじわるの木が三本、しんせつな木が三本、ぼくはもうこれでいいと思ったので北風をふかせたのです。」

先生「落葉じゆどときわ木が三本ずつになっているところがないかい。でたらめな童話にならず、ちゃんとした形を持っている。」

野村「それに、大川君が書いたあの北風が、氷のようにつめたい手

でいじわるの木をなでまわすところは、むねがすつとするよ。
青山「少し、かわいそうだけど。」

北川「いじわるの三本が、しんせつな木の悪口を言うところはどう。」

高田「あそこは、ぼくが書いたのだけど、なくてもよかつたかな。」

先生「いや、あそこもなかなかおもしろいよ。ただおしまいのしめくくりのところか、もうちょっとおもしろく書けていたらと思ふのだが、初めてにしてはとてもよく書けている。」

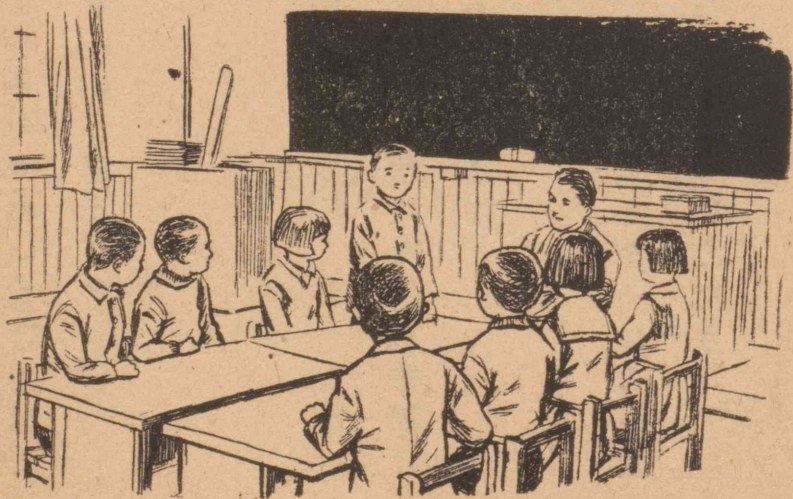
山田「自分より前の人かどんなことを書いているかを読むのは楽しみですわね。」

北川「わたしは、受持ちのところをどう書くか考えがうかばなくて……。」

高田「ぼくもこまりましたが、先生のおつしやったように、前の人の書いたところを何べんもくり返して読んでみると、自然に書くことが出てきました。」

先生「さつき少しほめすぎたから、こんどはちよつと、よくないところを言うかな。」

山田「どうぞ。」
先生「そうだね、この童話はまだ少し一本調子だね。受けついだ人は話の



広がりをしてできるだけたくさん考えて、その中のいちばんおもしろいのを書きのばすようにするといいと思うのだが。

林 「変化が少ないのですね。」

先生 「まあそうなんだ。」

大川 「それは、こんどからもつと気をつけましょう。」

北川 「それから、これはだいたいの冬の話ですが、やはりその季節に合わせた童話にした方が感じが出ると思います。」

先生 「それも、いい考えですね。」

山田 「いろいろ、いい勉強ができました。では、おしまいにこの童話に題をつけましょう。考えて来た人は言ってください。」

青山 「かわいそうな小鳥。」

林 「春を待つ小鳥。」

野村 「しんせつな木。」

高田 「しんせつな木といじわるな木。……少し長いかな。」

中島 「森の小鳥。」

北川 「ときわ木と小鳥。」

山田 「いろいろ出ましたね。このうちがいいのはありませんか。」

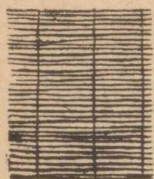
大川 「ときわ木と小鳥はいいね。」

高田 「ぼくもそれにさんせいです。」

中島 「いいね。それに決めましょう。」

山田 「この童話にいい名まえがつけました。『ときわ木と小鳥』が、ぼくらの童話の第一ぺんです。つづいて第二へんを書きたい

夏の詩



ここには、夏の詩が三つほど出されています。山の子どもには、海の詩はわかりにくいかもしれませんが、草かりなどをしたことのない町の子どもには、この詩を深くあじわうことはむりかもしれません。でも、どの詩も、それほどわかりにくい詩ではありませんから、何回か読んでいるうちには、親んでもらえると思います。静かに、自分の気持ちに合わせて詩を読むということは、楽しいものです。みなさんの中には、もう、じょうずに詩の書ける人もいますでしょう。また、この夏休みには、自分も詩を作ってみようと考えている人もあると思います。この詩は、そんな人に、きつとよいさんこうになると思います。

と思いますが、どうでしょう。

野村「すぐ取りかかってやろうよ。」

大川「たいへんな意気ごみだね。」

青山「それでは、このつぎもういちど集まって、第二の童話のじゆん番を決めたり、こまかな注意をし合ったりすることにしましょう。」

山田「これで座談会をおわりたいと思います。先生、どうもありがとうございました。みなさん、ごくろうさま。」

草かり

うしはもう起きています。

「よし、よし、おいしい まぐさを

かって来てやるよ。」

朝つゆをふむと きりっと 目がさめる。

さっくさっく、さっくさっく、

にいさんの かまがよくきれている。



きりの中で かつこうの音が遠い。

ぼくはかった青草をかごにつめる。

つゆのにおいか、草のにおいか、

すがすがしい 風がわたる。

山のいただきに 日がさしてきた。

山ゆりの花を かごにさしてかえろう。

うしが待っている。



海に来て

おひるきっかり この村に着きました。
かぶつていったピケのぼうしを 海水ぼうしにとりかえてすぐ海岸
へいきました。

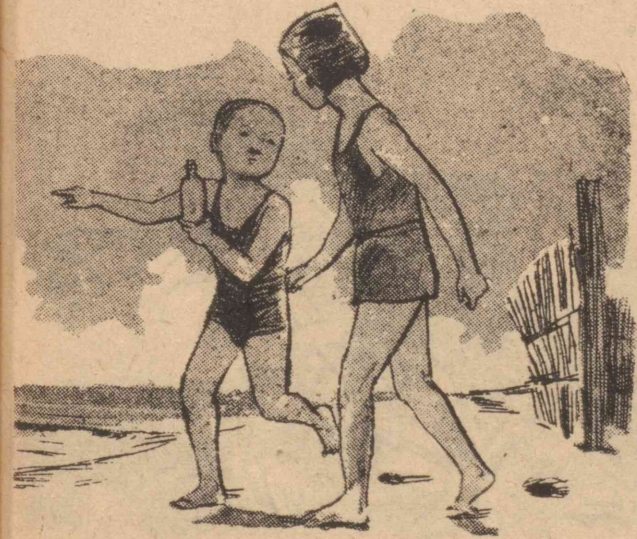
夏の海。

弟は道でつんだ黄色の花を小さなび
んに入れて流しました。

「アメリカまでいくね」

とごきげんです。

水平線の雲のみね 白いほ 海のに
おい。



夕方 またひとりでいきました。

打ちあげられた海草の中から

あなたにお送りするさくらがいを見つ
けました。

あなたはきつとこのかいから

海のひびきをきくでしょう。

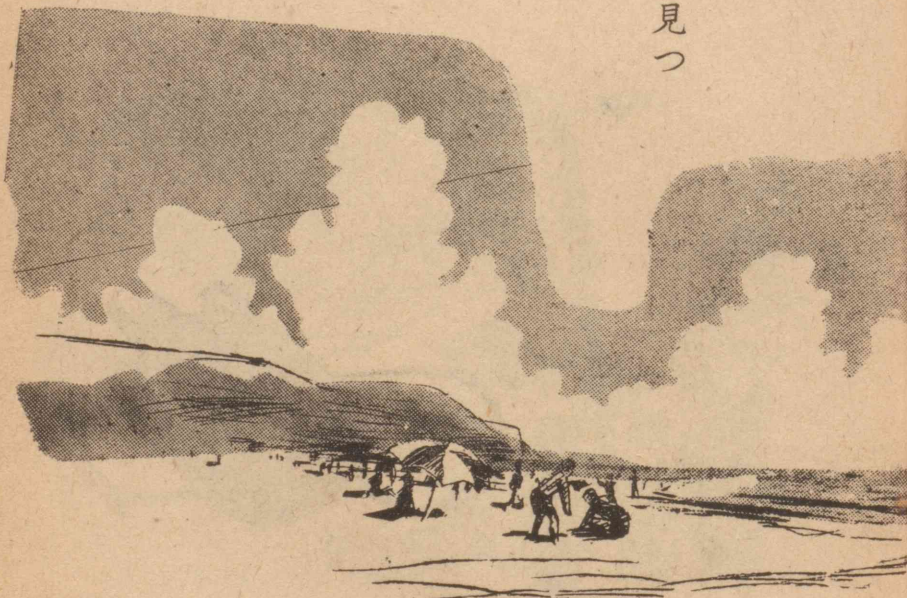
波は

手を入れようとして

ちよつとあわてたほどこい青。

お元気で。

そしておたよりをね。



すいとう

夜の かべに かかっている
ぼくの すいとうよ。

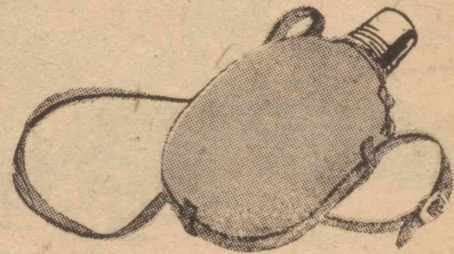
おまえは この春

ぼくと ハイキングにいったね。

とうげの道を のぼるとき

きりの中で

かっこうがないていたね。



おまえは なんでもつめたい水で
ぼくに 元気をつけてくれたね。

それから村に出て

えのぐざらのように きれいな

れんげ畑で やすんだとき

空には ひばりが ないていたね。

はちの は音に

ねむたくなつたね。

すいとうよ。



ひっそり かべにかかっている
 ぼくのすいとうよ。

おまえを見ています

山の風音が 聞こえてくる。

鳥のなき声が 聞こえてくる。

花のにおいが ただよってくる。



ことばの表

○あいかわらす	三	いちねんご	五	○えいがけきじょう	二六	おわすれもの	一六
あいきょう	三	いっしゅうかん	三	えがいて(えがく)	二四	おわび	四九
あいちょう	空	いっしん	四	○オーヂェボン・クラブ	空	おわりちょう	二五
あおもりゆき	三	いっせつ	九	おいで	三	おわん	五
あおやま ゆりこ	八	いっぶん	三	おおかわ あきら	五	おん	一〇
あさって	九	いっぼう	空	おかし	三	○かいじん	空
あとおし	九	いっぼんちようし	空	おくじょう	二七	がいこくじん	一六
あまど	九	いっぼんちようし	空	おくらし(くらす)	七	がいこんち	一〇
あまやかさす(あまやかす)	五	いましてがた	五	おさげ	三	がいじん	二七
あやしい	空	いよいよ	九	おしゃべり	三	がいすいぼう	二〇
アルミニウム	空	いらい	六	おそらく	九	かいせつ	一〇三
○いかにも	空	インダイヤ	三	おそろおそろ	空	かいせつ	一〇三
いきごみ	二	インド	三	おちつて	三	かいだん	二〇
いきづまった(いきづまる)	九	○うえのえき	三	おちやばたけ	三	ががくはくぶつかん	二〇
いけかた	元	うおいちば	六	おつとめ	六	がかった	二五
いしだん	元	うしなつた(うしなう)	五	おうばらう(おっばらう)	九	かきつけて(かきつける)	四
いそろう	元	うすみどり	空	おとなり	元	かきつけて(かきつける)	四
いたがね	空	うっかり	二四	おなじみ	九	かくしゃ	三
いただき	二	うばいとる	九	おまわりさん	二五	かくせい	一六
いたるところ	空	うめたてて(うめたてる)	二六	おやどり	三	かくせいき	一五
いちじ	二	うらむ	五	オリ	三	かくとう	四
	三	うんてんだい	三	おれい	六	かし	六

かしげて(かしげる)	六	きたがわ	なるみ	六	こまもの	七
かしわ	八	きつかり		一〇	こみあう	六
かちどきばし	七	きつぷうりば		三	こんきづよく	六
かつしょく	三	きてき		三	コンクリート	六
かつやく	三	きぶん		三	こんもり	三
かなあみ	三	きぼう		三	〇さいきん	三
かばう	三	きゆうこうれっしや		三	さいごうさん	三
かばん	六	きゆうしき		三	さく	九
かぶき	六	きようばし		三	さくもつ	九
かめん	六	きようみ		三	さくや	九
からかつて(からかう)	八	きようれつ		三	さくらがい	五
がらがらへび	八	きりひらいた(きりひらく)		三	ささやく	一〇
かれき	六	きりん		三	さすが(に)	三
かれくさ	三	きんざ		三	させき	六
かわかせ	七	〇くさかり		九	さだんかい	六
かわはら	七	ぐすぐす		九	さっぱり	三
カンガル	三	くどく		九	さまよい(さまよう)	三
かんげい	三	くぼめた(くぼめる)		九	さわやか(な)	三
かんさい	五	クラス		六	さんざん	三
かんしゃ	五	くりひろげられ		六	〇し	六
かんじょう	六	(くりひろげる)		六	しか	六
カンナ	六	グループ		六	じかん	九
かんない	三	くろろ		三	しきつめ(しきつめる)	九
〇きおん	三	くろやま		三	じこくひょう	九
きけん	三	くわしく		三	じすう	九
きせつ	六	〇けいかく		三	しぜん	六

したく	六	しんばしえんぶじょう	二六	だいいち	六	つうじる	四
したしむ	七	しんぶんしゃ	二七	たいさい	五	つうろ	一八
しっとり(と)	七	しんりよく	六	だいいじょうぶ	九	つきぢ	二六
じてんしゃ	二	〇すいへいせん	一〇	たいせつ	一〇	つきまとう	二六
しなもの	三	すきやばし	二七	だいぶぶん	二	つごう	六
しばふ	三	スクリーン	四	だいぶん	二	つぼ	六
しめくり	四	すじがき	四	たかだ	八	つめかけて(つめかける)	三
しめった(しめる)	三	すそ	四	ただ	五	つゆ	三
しも	三	すそ	五	ただよって	一〇	〇てあて	三
しゃちゅう	三	すなじ	七	たてもの	六	てき	七
しゅうかん	三	スポーツ	七	たのもしく	五	てすう	一〇
じゅうじろ	二	ズボン	二	たびごころ	三	てすり	一〇
じゅうりょうしき	七	すました	三	たびたび	二	てたらめ	三
じゅうつばつ	六	すみだがわ	三	たんなトンネル	三	てっぽう	三
じゅうもく	六	すれちがって(すれちがう)	二六	〇ぢいろ	三	デパート	三
じゅうんばん	三	〇せいかつ	五	ちかてつ	二	でんききかんしゃ	三
じょうきよう	五	せいしつ	七	ちからつきて	五	でんこう	三
じょうしゃ	九	せいちょう	七	ちじょう	二	でんしょばと	三
じょうてん	三	せきにん	三	ちどり	九	でんねんしょくえいが	三
じょうない	三	〇せんしゆ	三	ちほう	六	でんぶん	三
じょうはんしん	四	〇そうぞう	三	ちゆうがくせい	二	でんぼう	九
じョカ	六	そくたつ	一八	ちゆうささいりょう	三	〇とうかいどう	三
じョくりょう	五	そひえて(そひえる)	一四	ちようさいり	三	とうきようえき	九
じョディ	五	そまつ	七	ちようるい	三	とうきようげきじょう	九
しんけん	五	〇タイ	七	ちよこん(と)	三	とうげ	一〇
しんけん	五	だい	七	〇ついで	三		一〇

どうろうし	六	なんばい	三	はん	八	ふせぐ	六
どうぞう	二	○にあつた(にあら)	三	ばんごう	三	ふなつき	六
とうちやく	九	にほんばし	三	はんつき	六	ブラン	六
とうてい	九	にもつ	一	○ビケ	二	ふりそそぐ	六
どうぶつえん	三	にゅうじょうけん	一	びじゅつかん	二	ふるい	八
どうわ	三	にれんじゅう	四	びたつ(と)	二	フロリダ	八
とおざけた(とおざける)	七	○ぬまづ	五	びっこ	五	プロヤキゅう	八
とかい	二	○ねんがっぴ	五	ひっそり	五	○ペニー	八
ときわぎ	三	○ノート	五	ひとざと	二	ベル	八
とけこんで(とけこむ)	三	のうさくぶつ	五	ひとで	二	○ホーム	八
とち	三	のうじょう	五	ひとどおり	二	ほうこくしょ	八
とつくに	六	のそだち	五	ひとなみ	二	ほうし	八
とりどり	七	のどか	五	ひとりぼっち	二	ほうそうきよく	八
とりもどす	七	のむら	五	ひとりよがり	二	ほおえみ	八
どりよく	七	○はいいろ	五	ひな	七	ほこり	八
○なえ	六	はいく	五	ひびやこうえん	七	ほころびて(ほころびる)	八
なかじま すすむ	六	はおと	五	ひま	七	ほどり	八
なきごえ	六	はかせ	五	ひょう	七	ほとんど	八
なくさめられて	五	はくぶつかん	五	○ぶあつく	七	ほのぐらい	八
(なくさめる)	五	はぐれそう(はぐれる)	五	ふあん	七	ほんの	八
なけれは	八	ばしょ	五	フォダウイン	七	ほんぶ	八
なのはな	八	バス	五	フォレスト	七	○まいご	八
なみ	七	はでやか	五	ふくそう	七	まかせる	八
なみき	七	はな	五	ぶじ	七		
なんじゅうばい	七	はままつ	五	ふしんせつ	七		
なんなく	七	はやし ゆたか	五		七		

またたくま(に)	六	みはらし	七	ゆうめい	七	わた	七
またかねて(またかねる)	六	みょうごにち	七	ゆかたがけ	七	わだい	七
まっか	三	○むかえた(むかえる)	五	ゆきき	二	わりあい(に)	三
まっさき	三	むじゃき	五	ゆって(ゆう)	六	わるくち	三
まったく	六	むぞうさ	三	○よあけ	二	わるもの	六
まっぴら	八	むだ	二	ようじん	二		
まどぎわ	六	○めいわく	八	ようひんるい	七		
まどめて	五	めでたく	七	よくばって(よくばる)	九		
まなざし	三	めんどろ	六	よつつじ	二		
まなんだ(まなぶ)	五	○もうしわけ(ない)	六	よっぽど	八		
まばゆい	元	もとにして	六	よてい	八		
まほうつかい	六	ものがたり	四	よなか	三		
まんかい	三	ものずき	八	よほど	二		
まんぞく	三	もまれながら(もまれる)	四	よりかかった(よりかかる)	三		
まんなか	三	もんで(もむ)	六	よろしく	七		
○みえかくれ	六	○やくだつ	八	○ライオン	五		
みおろし(みおろす)	三	やぐら	二	らいしんし	三		
みかいち	三	やすい	一	らくようじゅ	三		
みごと	三	やすこ(さん)	一	ランプ	三		
みずとり	三	やなぎ	三	○りょうきん	一		
みせかざり	四	やまだ まさお	四	りょうしん	一		
みちこ(さん)	五	やまみち	三	りょうき	五		
みとおし	七	やまゆり	一	リレーしき	七		
みなり	三	○ゆうえき	六	○れっしゅ	五		
みなれない	六	ゆうひ	二	れんらく	五		
みのがす	五	ゆうびんきよく	二	○わきでる	三		

Copyright 1950, by
The Kyōiku Toshō Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小国 417

四年生の国語 上

Approved by Ministry of Education
(Date 1950)

電車のかなで…大木 実氏
海に来て…竹内てるよ氏
すずめと少女、ちどりの観察
中西 悟堂氏
すいとろ…村野 四郎氏

左の作品を本書に掲載させて
いただきましたことについて、
著作者諸先生に心から感謝を
いたします。なお、規則や指示に
したがって多少加除訂正のやむを
えなかつたことについて御諒解を
お願いいたします。

感謝

編者

東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
理事 長 東京高等師範学校教授 佐藤保太郎
担当執筆者 東京高等師範学校教諭 田中豊太郎
花田哲幸
青木幹勇
森下巖
小島忠治
大槻定雄

表紙

田原 輝夫

さしえ

大槻定雄

印刷 昭和二十五年
発行 昭和二十五年

月 日

定価 円

著作者

財団法人 教育図書研究会

発行者

会長 務台理作

印刷者

代表者 川口芳太郎

発行所

代表者 川口芳太郎
学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地
学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指図書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のもの無断發行を禁ずる。

漢字の表

京	行	竹	信	君	父	母	癸	報	式	勉	說
5	5	5	5	5	6	6	6	6	7	8	8
函	表	数	料	局	題	齒	当	初	感	昨	線
9	9	10	10	10	12	13	14	14	14	15	16
内	速	計	都	無	事	茶	(座)	公	園	念	商
16	18	18	20	21	21	22	22	22	22	23	23
交	合	向	新	市	有	洋	画	皇	鐵	引	配
25	25	25	26	26	27	27	28	28	29	30	31
死	倍	鼻	喜	術	館	博	科	台	番	号	服
32	33	34	35	36	36	36	36	39	42	42	43
暗	然	未	農	才	旧	住	活	仕	命	努	成
43	43	45	45	45	46	46	48	49	49	50	50
失	变	想	最	綠	受	滿	部	週	深	切	相
51	51	53	55	56	56	57	57	58	58	59	60
談	季	節	調	愛	觀	察	員	類	告	查	材
60	61	61	61	61	62	62	62	63	63	63	63
益	害	飛	研	究	像	算	敵	他	似	毒	法
64	64	67	69	69	69	69	71	71	73	73	76
實	礼	進	幸	福	以	司	士	化	体		
82	86	86	87	87	88	90	93	96	96		

庫
50
769

広島大学図書
0130449769


おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書からより良質のもの（新教科書用紙）を使用することになつて居ります。